# 北陸自動車道遺跡調査報告

## ―― 魚 津 市 編 ――

湯 上 B 遺 跡

湯 上 C 遺 跡

宮 津 C 遺 跡

1982年3月

富山県教育委員会

# 北陸自動車道遺跡調査報告

## ―― 魚　津　市　編 ――

湯　上　B　遺　跡

湯　上　C　遺　跡

宮　津　C　遺　跡

1982年3月

富山県教育委員会

# 序

北陸自動車道富山・朝日間は、昭和48年に路線が発表されて以来、置県100年にあたる昭和58年度開通を目標に着々と工事が進められております。これに伴い、路線内にかかる遺跡の発掘調査もそのピークをむかえ、当教育委員会では全力をあげて、対応してきました。その結果、昭和45年度には上市町江上Ａ遺跡で、弥生時代の生活の跡を発掘するなど、多くの成果を得ております。

このたび、魚津市湯上地区で実施しました発掘調査においても、弥生時代後期ないし古墳時代初期の住居跡などを発見することができました。

これらは、従来不明な点が多かった、富山県東部における弥生時代から古墳時代にかけての歴史を理解する上で、貴重な資料となるものと思われます。その調査結果をとりまとめた本書が、文化財保護思想の普及と古代史理解のうえで役立てば、幸いと存じます。

最後に、調査にあたり、終始ご協力をいただいた地元をはじめ、関係各機関、現場で直接発掘にたずさわっていただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

昭和 57 年 3 月 31 日

富山県教育委員会

教育長　屋 敷 平 州

# 例　言

1．本書は，高速自動車国道北陸自動車道建設に伴う魚津市関係の埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2．調査は，日本道路公団新潟建設局の委託を受け，富山県教育委員会が昭和55年度と56年度の2箇年にわたって実施した。

3．調査した遺跡と調査期間は以下のとおりである。

湯上Ｂ遺跡（第一次）昭和55年５月６日～11月28日
　　（第二次）昭和56年４月20日～８月31日
湯上Ｃ遺跡　　昭和55年５月６日～５月７日
宮津Ｃ遺跡　　昭和55年４月17日～４月21日

4．調査は，富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事岸本雅敏（昭和55年度）・同山本正敏（昭和56年度）・同橋本正春（昭和55・56年度）が担当し，同狩野　睦が参加した。

なお調査事務局は，富山県埋蔵文化財センターに置き，主任荒井真一郎，文化財保護主事山本正敏（昭和55年度）同神保孝造（昭和56年度）が調査事務を担当し，所長竹内俊一（昭和55年度），同古岡英明（昭和56年度）が総括した。

5．調査から報告書作成に至る過程で，次の諸氏・諸機関から指導と助言及び協力を得た。ここに記して感謝の意を表します（順不同）。

広田寿三郎，近藤義郎，秋山進午，甘粕　健，橋本澄夫，小島俊彰，田代昭夫，橋本　正，藤田富士夫，斉藤　隆，麻柄一志，安念幹倫，日本道路公団魚津工事事務所，魚津市教育委員会，地元魚津市湯上地区。

6．遺構・遺物の写真は狩野　睦，橋本正春が担当し，遺物整理については富山県埋蔵文化財センターの職員の協力を得た。

7．本書の編集・執筆は上記の調査担当者が行ない，文責は各文末に記した。

# 目　　次

Ⅰ　序　章……1

1．調査経過……1

2．遺跡の位置と環境……3

Ⅱ　湯上B遺跡……3

1．層　位……3

2．第1地区……4

3．第2地区……5

4．第3地区……6

5．第4地区……8

6．第5・第6地区……10

7．総　括……11

Ⅲ　湯上C遺跡……14

Ⅳ　宮津C遺跡……14

参考文献……15

# 挿　　図

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡……2

第2図　地形と発掘範囲……2

第3図　玦状耳飾・石鏃実測図……6

# 図　　版

図版第１　湯上Ｂ遺跡発掘全体図
図版第２　湯上Ｂ遺跡第１・第２地区遺構分布図
図版第３　湯上Ｂ遺跡第４地区遺構分布図
図版第４　湯上Ｂ遺跡第３地区遺構分布図
図版第５　湯上Ｂ遺跡第５・第６地区遺構分布図
図版第６　湯上Ｂ遺跡遠景・第１地区全景
図版第７　湯上Ｂ遺跡第２地区全景・遺構
図版第８　湯上Ｂ遺跡第３地区全景・遺構
図版第９　湯上Ｂ遺跡第３地区遺構
図版第10　湯上Ｂ遺跡第４地区全景
図版第11　湯上Ｂ遺跡第４地区遺構
図版第12　湯上Ｂ遺跡第４地区遺構
図版第13　湯上Ｂ遺跡第５・第６地区全景・遺構
図版第14　湯上Ｂ遺跡第１地区出土遺物実測図
図版第15　湯上Ｂ遺跡第１地区出土遺物
図版第16　湯上Ｂ遺跡第２地区，第５・第６地区出土遺物実測図
図版第17　湯上Ｂ遺跡第２地区，第５・第６地区出土遺物
図版第18　湯上Ｂ遺跡第３地区出土遺物実測図
図版第19　湯上Ｂ遺跡第３地区出土遺物
図版第20　湯上Ｂ遺跡第３地区出土遺物実測図
図版第21　湯上Ｂ遺跡第３地区出土遺物
図版第22　湯上Ｂ遺跡第３地区出土遺物実測図
図版第23　湯上Ｂ遺跡第３地区出土遺物
図版第24　湯上Ｂ遺跡第４地区出土遺物実測図
図版第25　湯上Ｂ遺跡第４地区出土遺物
図版第26　湯上Ｂ遺跡第４地区出土遺物実測図
図版第27　湯上Ｂ遺跡第４地区出土遺物
図版第28　湯上Ｂ遺跡第４地区出土遺物実測図
図版第29　湯上Ｂ遺跡第４地区出土遺物
図版第30　湯上Ｂ遺跡第４地区出土遺物実測図
図版第31　湯上Ｂ遺跡第４地区出土遺物
図版第32　湯上Ｃ遺跡・宮津Ｃ遺跡地形図及び発掘区
図版第33　湯上Ｃ遺跡・宮津Ｃ遺跡全景

# Ⅰ 序　　章

## 1．調 査 経 過

### A　調査の契機

北陸自動車道富山・朝日間は，昭和48年に路線発表以来，昭和58年度開通を目標に工事が進められ，現在富山・滑川がすでに供用開始されている。この建設工事に伴って，路線及び土砂採取地にかかる遺跡の発掘調査も昭和51年頃から始まり，昭和54年度には立山町・上市町で14遺跡の調査が行なわれるなどそのピークをむかえることとなった。これと並行して魚津市関係の遺跡調査について，日本道路公団新潟建設局及び魚津市教育委員会と協議を進めた。その結果，湯上Ｂ・湯上Ｃ・宮津Ｃの３遺跡は富山県教育委員会が，残りの遺跡については魚津市教育委員会が担当することになった。富山県教育委員会では立山町・上市町関係の遺跡調査に引き続き，昭和55年度から調査を開始することに決定した。

### B　予備調査

昭和49年度に実施した分布調査〔橋本1974〕で確認した３遺跡は，若干の土器・石器が採集されているだけで，内容については不明な点が多かった。そこでまず最初に遺跡の範囲・内容を明確にするため，試掘調査を実施することにした。湯上Ｂ遺跡はサービスエリア部分にかかるために，調査対象地は約70,000㎡の広大な面積にのぼる。そこで全域にわたりグリッドを組み，ほぼ10m おきに２ｍ×４ｍの試掘区を設けて掘り下げた。他の２遺跡については，とりあえず，５～10m おきに任意に試掘区を設けて掘り下げた。調査は，昭和55年４月17日に宮津Ｃ遺跡から開始し，同年６月２日に一部を残して終了した。その結果，宮津Ｃ・湯上Ｃ遺跡については，遺構・遺物は全く発見できず，遺跡は広がっていないものと判断した。湯上Ｂ遺跡では，６箇所の遺物集中地点が認められた。試掘調査終了後，日本道路公団新潟建設局と協議し，湯上Ｂ遺跡の６箇所の遺物集中地点は記録保存を前提とした調査を実施することになった。

### C　湯上Ｂ遺跡の本調査

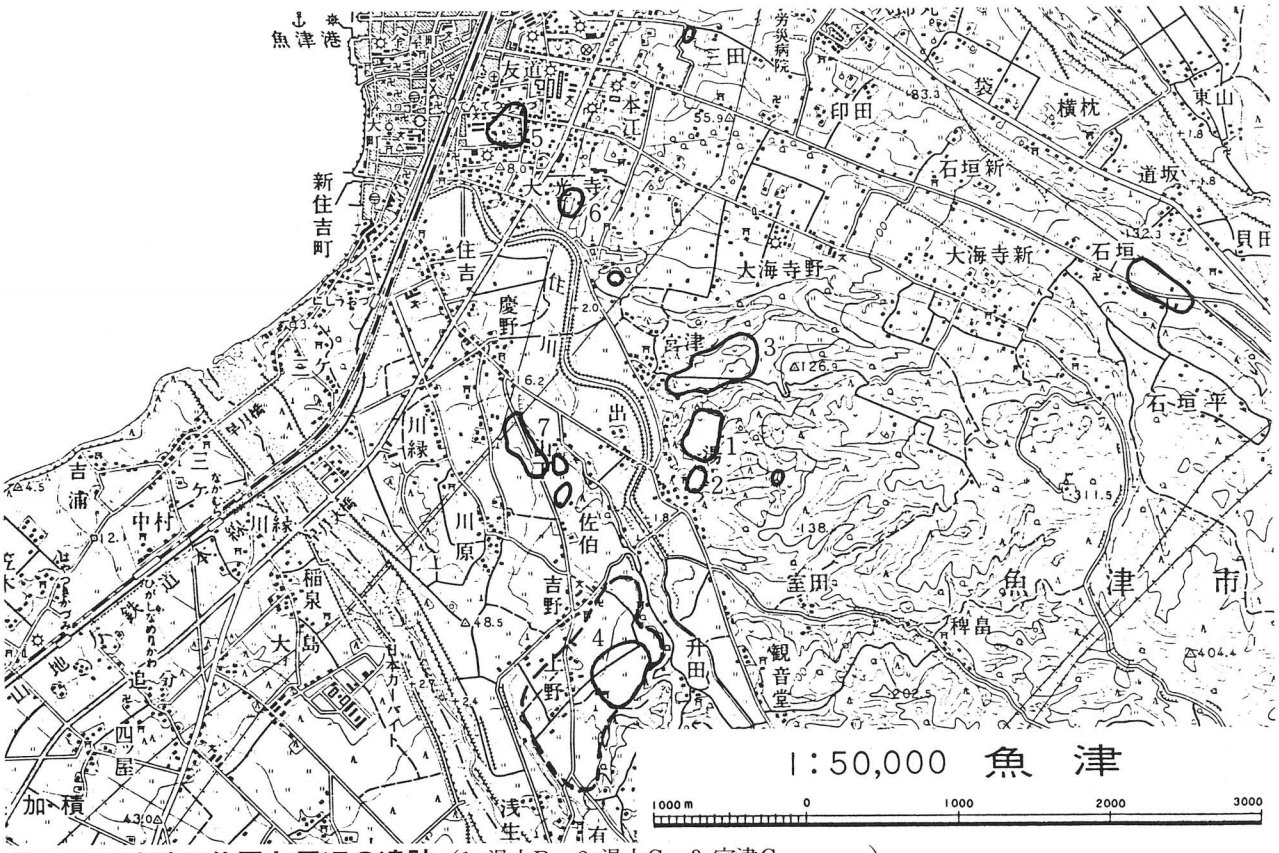
昭和55年度は第１次調査として，６月から11月末まで，６箇所のうち第１・第２・第５・第６地区及び第３地区の一部を対象として行った。調査はまず，パワーシャベルとブルドーザーによって表土除去を行い，その後人力による包含層の発掘と遺構の検出を行った。その結果，後で詳述するように，第１・第２地区では中世以降の穴や弥生時代後期ないし古墳時代初期の土器，第３地区でも同時期の竪穴住居跡や穴，第５・第６地区では古墳時代の竪穴住居跡などを発見した。そしてこれらの遺構の実測と写真撮影を行って調査を一旦終了した。

昭和56年度には第２次調査として，４月から９月まで，第３地区の残りと第４地区の調査を行った。この調査でも第４地区から弥生時代後期ないし古墳時代初期の竪穴住居跡や穴，掘立柱建物などを発掘することができた。最後に発掘調査後の地形測量を測量会社に委託し，調査を完了した。

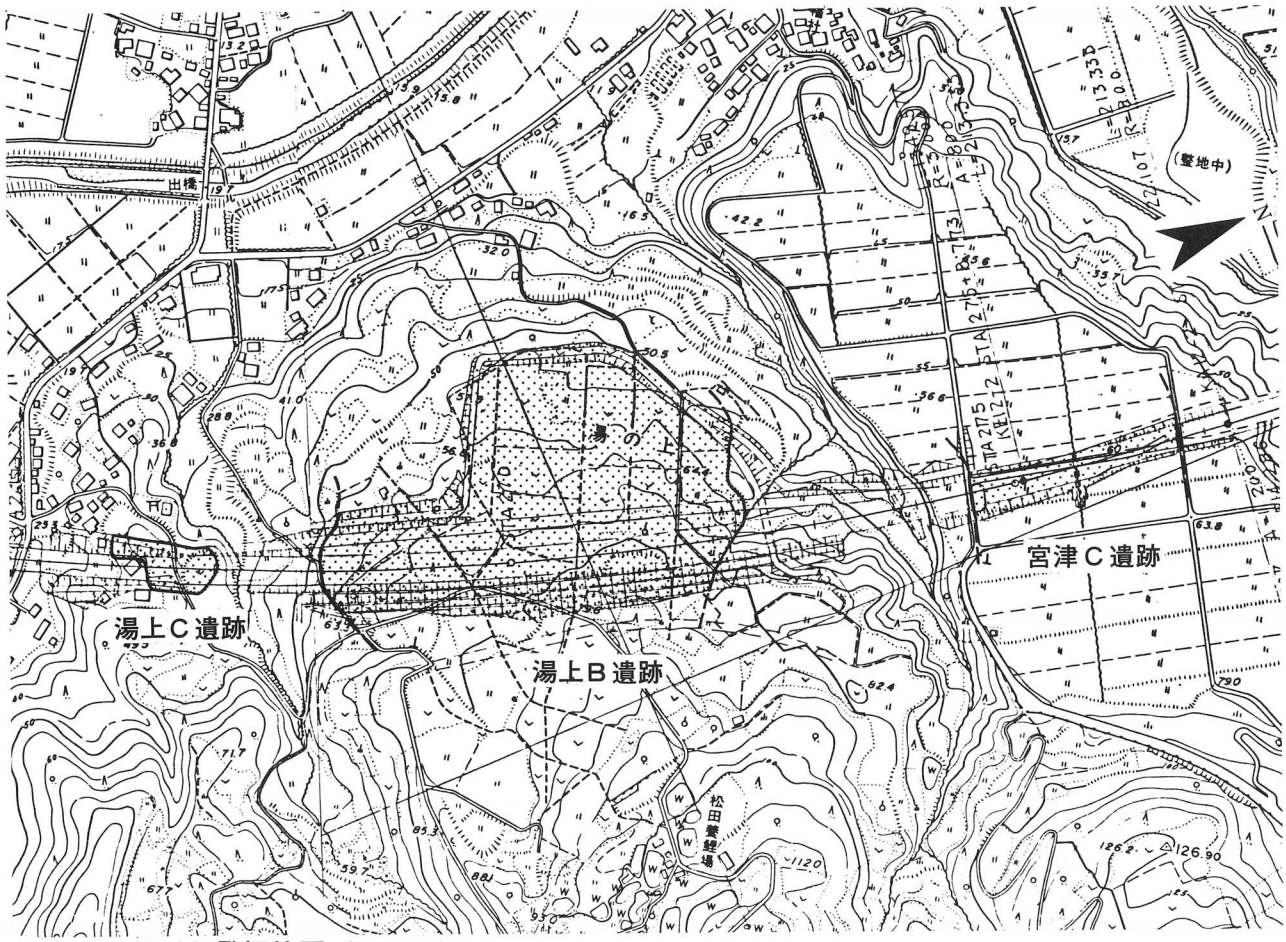
なお，各地区ごとの調査面積は以下のとおりである。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 第１地区 | 5,700㎡ | | 第４地区 | 5,300㎡ |
| 第２地区 | | | 第５地区 | 3,400㎡ |
| 第３地区 | （第１次） | 10,200㎡ | 第６地区 | |
| 〃 | （第２次） | 2,000㎡ | 以上合計26,600㎡ | |

（山本正敏）




**第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡**（1.湯上B，2.湯上C，3.宮津C
4.早月上野，5.友道，6.大光寺，7.佐伯）




**第2図　地形と発掘範囲**（1/7,500）

## 2．遺跡の位置と環境

### A　遺跡の位置と地形

調査した3遺跡は富山県の東部，魚津市湯上及び宮津地区にある(第1図)。このあたりは，立山連峰から続く山塊が最も海岸近くにせまる部分で，多くの河川の複合扇状地と河岸段丘の発達がみられる。遺跡は，魚津市の東側に広がる野方台地の西端部に位置する。かなり浸食の進んだ丘陵地形で，西側は急な崖となって角川の氾濫原に続く（第2図)。それぞれの遺跡は深い谷によって隔てられている。湯上B・宮津C遺跡では広い平担面をもつ一方，湯上C遺跡は，狭い尾根上にのる。標高は40～80mである。

遺跡の現状は，湯上B・C遺跡では畑地が大半を占め，一部水田や山林となっている。宮津C遺跡はすべて水田でほ場整備も終了している。

### B　周辺の遺跡

河岸段丘の発達している地形から，この周辺では縄文時代の集落遺跡が多くみられる。北西約2kmには縄文時代中期の集落である大光寺遺跡〔魚津市教委1967〕,南方約2kmの上野台地には先土器時代から中世にわたる早月上野遺跡〔橋本他1975〕〔岸本他1976〕,東方3kmにはこれも縄文時代中期から晩期にわたる石垣遺跡〔魚津市教委1971〕がある。また角川をはさんで対岸の台地上には，弥生時代後期ないし古墳時代初期の住居跡や土器群をはじめ，平安時代前期の掘立柱建物26棟を発掘した佐伯遺跡〔橋本他1979〕が位置する。

宮津C遺跡では，今回の調査地の西側，段丘崖に近い地点で，今から10数年前にほ場整備を実施した際，石組炉や縄文時代中期の土器・石器（石棒・砥石など）が発見されている。

（山本正敏）

# Ⅱ 湯上（ゆのえ）B 遺跡

湯上B遺跡は面積が広く，調査地区も6地区にのぼる。この6地区はそれぞれに独立させて別箇の遺跡としてあつかってよい広さを有するが，地形的にみれば同一の丘陵上にあり，従来から広く湯上B遺跡と呼称しているため，一応この遺跡名称を冠し，各発掘地区を第1～第6地区としておく。なお，第5・第6地区は結局両者あわせて一地区とし，第1・第2地区も境界を一部接している。次に基本的な層序について簡単に触れた後，各地区ごとに調査結果を述べることにする。

## 1．層　位

湯上B遺跡の土層堆積は，基本的には，1層耕作土，2層有機質に富む黒色もしくは黒褐色土，3層黄褐色粘土となる。しかしながら埋没谷では2層が厚く堆積し，逆に尾根部では流出してほとんどみられない場合があったり，また開墾の際に削平した所では1層の直下に，3層やさらにその下の砂礫層が露出し，低い所では厚く盛土されていたりしており，場所によってはかなり変化が認められる。

（山本正敏）

# 2．第 1 地区

第１地区は，湯上Ｂ遺跡の北東端に位置し，北側には大きく深い谷がある。遺跡は，谷に向かって伸びる台地上に所在する。台地の南側半分は，平坦で，北・西側が谷に向かって急な傾斜を持ち始める。

## Ａ　遺　構

遺構には，平安時代に属する穴１箇所と所属時代不明の焼土が４箇所検出された。他に，穴群があるが，時代，性格などは，不明である。西側の谷近辺に，遺構が集中している。

穴は，直径約40cmの円形を呈し，深さ約50cmを測る。出土遺物は，土師器と糸切り底の杯（平安時代）である。

焼土は，台地西側の小谷覆土中にあった。その焼土近くに，土器（古墳時代初頭）の集中が，数箇所あった。そこで，古墳時代初頭頃の生活面を確認するため，遺構などの検出作業を数回行ったが明らかに出来なかった。

この他の遺構は，穴群である。これは，西側の小谷近くに集中していた。穴群に対しては，柱穴かどうかの確認を行ったが，明らかに出来なかった。台地の南側は，後世の削平を受けていたため，遺構は検出できなかった。

## Ｂ　遺　物（第３図１・図版第14・15）

遺物には，土器・石器がある。土器では，縄文時代（前～晩期）・弥生時代（中期）・弥生時代後期～古墳時代初期・奈良時代～平安時代とそれ以後のものがある。石器は，縄文時代（前期）の玦状耳飾である。

縄文時代　土器の年代を大まかにわければ，34は前期後葉・35は中期・36～37は後期・39～41は後期～晩期・38は晩期前葉である。前期後葉の福浦上層式に比定できる34と，図示はしていないが木目状撚糸文を施す土器片がある。後期は，中屋式に比定できる36と，井口３式頃と思われる素文で小波状口縁の土器片がある。晩期は，勝木原式並行の38がある。40・41は，同一個体で，中屋式かと思われる。

第３図１は，玦状耳飾で前期中頃と考えられ，34に伴うと思われる。平面は円形を呈し，断面は平偏で，蒲鉾形・円形とはならない。石質は，滑石系である。弥生時代中期では，天王山式土器が３点ある。

弥生時代後期～古墳時代初期（図版第14の１～５・10～32）　土器の器種には，壺・甕・鉢・高杯・小型土器などがある。壺は，長頸壺（１・２・５）・壺（３・４）の二者がある。２は，細頸壺の可能性があり，内面が黒く，ヘラミガキが見られる。長頸壺の内外面には，ハケメ痕が目立つ。甕には，「く」の字状口縁（10～17）・複合口縁（18・19）のものがある。前者は，さらに口縁端部の形状により細分できるが、ここでは大きく二大別に留めておく。甕の特徴では，内面頸部以下のハケメ痕が目立ち，ヘラケズリ例（13）は少なく，複合口縁の外面に，クシ状工具による平行線文を持つものが見られない。鉢（20～22）は，器形の異なるものが１点ずつあり，まとめられなかった。20は，高杯の杯部に近く，口縁が大きく外開きする。21は「く」の字口縁の甕に近いが，小ぶりである。22は凹む底部から口縁まで，直線的に開く器形で，内面のヘラケズリが目立つ。高杯は，口縁部の形状が同様であるため，脚により大別する。棒状脚（27）と「ハ」の字状に外開きする例（23～26・28～29）に分けられる。25は，鉢20の器形と似るため，鉢の可能性もある。高杯は，丁寧なヘラミガキが目立ち，大形品は少ない。また，丹塗り例は少ない。32は，小形土器で，31は器種が不明で，外面はヘラミガキ・黒斑が見られ内面をナデる。その他に，古墳・平安時代の土器がある。６～９は，「く」の字の甕で，器形・形状などから土師器第２様式〔吉岡1967〕と考える。

簡単にまとめると，次のようになる。(1)遺構数が少ない。(2)弥生時代後期～古墳時代初期の遺物は，他時期のものに比べて多いが，遺構は検出できなかった。(3)同時期の土器は，器種・大型品・丹塗り土器が少ない。(4)主体を占める土器群は，塚崎Ⅰ式〔吉岡他1976〕頃と考えておく。

（橋本正春）

# 3．第 2 地区

湯上Ｂ遺跡の北東部には，一つの小山があり，その頂部は開墾されることなく雑木林としてとり残されていた。第２地区は，小山の裾一帯を含み，その中ほどにはわずかながら平坦面がみられる。遺構はこの平坦面上に形成されており，その分布は，第２地区の北西端に近いＸ154～158，Ｙ70～76のごく狭い範囲に限られる（図版第７）。

## Ａ　遺　構（図版第７）

検出した遺構は，穴４箇所，溝３条，長方形遺構１箇所である。１号穴は，二つの円形の穴を組み合わせたものでプランは瓢簞形である。規模は全長1.85m，幅１m，深さ0.25m である。穴の東半部には，平坦な床面に厚さ７cm，径70cmの石製「容器」が埋置されていた。地山面から上は欠損していたが，原形はその倍近くの高さを有していたと思われる。一方、穴の西半部からは珠洲系陶器の大甕の底部破片が集中して出土し，元は一個の甕が埋置されていたものと考えられた。このように１号穴は，桶状の石製容器と大甕とが有機的に結びついて一つの機能を果していた遺構と推察されるが，その性格は不明とするほかない。[註1] 隣接して存在する２・３号穴は，ともに出土遺物が皆無であった。３号穴は西端から細い溝が南へ伸び，４号穴に切られている。４号穴は３号穴の西側にあり，一辺2.1m ×1.6m の隅円方形を呈する。深さわずか0.2m で，底面はほぼ平坦である。出土した施釉陶器の破片からみて，近世以降に形成されたものと考えられる。１・３号穴の北側には，これらを迂回するように細い溝が西流し，屈折して４号穴に伸びている。上記の穴と同時期に形成されたものであろう。

長方形遺構は，３・４号穴の北側からこれらとはやや離れて検出された。遺構は，黒色土中に黄褐色の粘質土をもって構築されている。四面にはこぶし大の石を塗りこめた厚さ15cmの壁体があり，底面も同様の技法で造られている。全体の形状は棺形をなす。規模は一辺1.7m ×1.2m，壁体の高さ0.3mである。遺構内には大小の円礫が充満していたが，これに混じって少量の越中瀬戸と共に，１号穴出土の珠洲系陶器の口縁部の破片が出土した。出土状況ならびに１号穴での在り方から推察すれば，もと１号穴にあったものが，この場に二次的に投棄されたものと考えられる。

## Ｂ　遺　物（図版第16・17）

珠洲系陶器　口径58.8cmの大甕である。上述のとおり，１号穴及び長方形遺構から出土した。口縁部は，伸びることなく頸部から外方へ丸く屈曲する。いわゆる玉縁口縁にはならず，又逆に，明瞭な稜ももたない。外面には，頸部に接して顕著な段がみられ，体部との境をなしている。体部の全面に条線状タタキメが施されているが，その方向は，頸部の直下では横方向，下方では右さがりである。タタキメの凹凸は浅く，かつ幅広である。内面には，頸部以下に無文の円形アテ具痕をとどめる。

この大甕は，吉岡康暢氏による珠洲陶の最新の編年〔吉岡1981〕と対照すれば，そのⅣ期にほぼ該当すると考えられ，おおよそ14世紀後半（南北朝時代）という年代を与えることができる。大甕のこうした年代観に大過ないものとすれば，これを出土した遺構の年代も，ほぼ同時期と見做しうるであろう。この地区から出土した珠洲系陶器がこの一個体であったことや，遺構群の周辺に越中瀬戸が散見したことから推論すれば，この大甕は，かなり長期にわたって伝世されたのち，おそらく江戸時代以降にこの地で使用された蓋然性が大であろう。[註2]

砥石　淡黄土色をした緻密な砂岩製である。横断面が台形を呈する長方形の砥石で，上下端に整形痕をとどめる。他の四面はいずれも砥面として使用されている。その一面には，鋭利な利器による直線上の陰刻が７条みられる。おそらく近世以降のものであろう。Ｘ154，Ｙ64出土。

（岸本雅敏）

註１　憶測の域を出るものではないが，想像をたくましくすれば，１号穴は，大小の用便を足すための廁の跡であるかもしれない。

註２　第２地区の遺構群が占地する一帯は，「屋敷跡」であるという伝承があり，事実，地元の古老によれば，この地に明治時代まで民家が一戸存在したという。本文中の推定をある程度補強するものである。

# 4．第 3 地 区

第３地区は，湯上Ｂ遺跡の南東部に位置し，標高は64～78m を測る。地形は，西に向かう傾斜が主であり，同方向に伸びる小谷が地区全域でみられる。北側には，第５・第６地区とを区別する比較的大きな谷が走る。谷と平行する小台地があり，遺構はその上に存在する。

## Ａ　遺　構（図版第４・第７・第８）

検出された遺構は，弥生時代後期～古墳時代初頭に属する住居跡１棟・穴２箇所，平安時代後期の土坑１箇所がある。

**弥生時代後期～古墳時代初頭**

第１号住居跡の平面形は，３分の２以上を欠くため判らないが，仮に，円形とすれば規模は直径10m を超す（床面積は約80㎡）。壁高は，東側で測れ，20cmある。周溝は，東壁を中心にみられ，一周すると思われる。周溝幅は，上部が20cm，下部が10cm になる。床面は，東側で幅約１m 程度が残るだけである。西側の床面と炉は，確認出来なかった。柱穴状の穴は，十数箇所あるが，柱根痕跡などはみられなかった。穴の形状・遺物の有無などから，柱穴の可能性の高いものを図示した。遺物は，東側の床面直上と壁際に集中している。同時期の住居跡の集成・分類を行っている橋本正氏の研究〔橋本1976〕を参考にすると，比較的大きな住居跡は，偶数主柱Ｘ型例に多くみられる。また，第４地区第１号住居跡は，４本主柱例で本住居跡に似る。これらをまとめて推察すると，偶数主柱を持つＸ型の系列に入ると考えられる。

次は，第１号住居跡から約20m 西方の地点に位置し，二つの穴は約10m の間隔を持ち近接している。台地上の遺構は，一直線上に並ぶ。

第１号穴　（図版第８）　平面形は，隅円方形を呈し，一辺120cm・深さ90cmの規模を持つ。底は，平坦で断面形は「凹」となる。土器・石器が十数点出土し，大半のものは，底面近くであった。

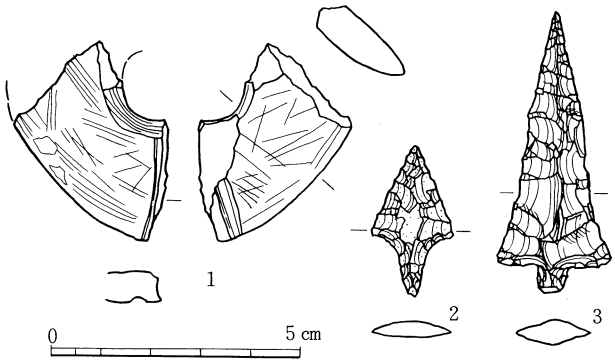
第２号穴　（図版第８）　穴は，直径 140cm の円で，深さは40cmあった。上部は，削平されたと思われる。底面は，平坦で，第１号穴より深く，同様の断面形を呈す。出土土器は少なかった。

穴の性格は，確認出来なかった。遺構は，出土土器より，全て弥生時代後期～古墳時代初頭に位置づけられる。

**平安時代**　（図版第８）

第１号土坑は，第１号住居跡の中央部に存在する。土坑は，住居跡を掘り込んでつくっており，両者には重複関係があり，前者が新しい。平面形は，隅円長方形で，長さ 180 cm・幅80cm・深さ20cmの規模である。主軸は，北東・南西方向である。覆土は，黒褐色の単層で，変化は特にみられなかった。遺構内には，土器と大小の石がみられ，大半のものは浮いている。土器には，土師器杯と須恵器の甕破片の２者があり，前者が大半を占め，その半分の個体が丹塗りであった。遺構の所属時期は，土師器の杯から平安時代前期に求められる。

性格的なものをまとめると，(1)丹塗り例が多い。(2)破片である。(3)単時間で埋められた可能性がある。となる。これらの事と形状から，第１号穴は墓の可能性がある。　（橋本正春）




**第３図　玦状耳飾・石鏃実測図**（1.第1地区，2.第3地区，3.第4地区）

## B　遺　物（図版第18～第22）

第３地区から出土した遺物は，縄文時代の土器・石器，弥生時代の土器，平安時代の土器である。そのうちの大部分は，１号住居跡とその周辺から出土した弥生土器である。

**縄文時代**　縄文土器（82）は，直線的に外反する口縁をもつ深鉢形土器である。胴部の上端及び口縁部の外面に，ＬＲの縄文を施す。頸部に六条の平行沈線を施し，その間を連続列点で埋める。胴部には，平行沈線と同一施文具による縦の押し引きが，一定間隔をおいて全面にみられる。晩期中葉の中屋式に比定できる。

石器には，打製石斧（83～88）と凹石（98）がある。石斧の未製品（87）には，線刻がみられる。このほか，鉄石英製の石核（81）があるが，これは先土器時代の所産である蓋然性をもつ。

**弥生時代**　弥生土器のみである。土器の大部分は，１号住居跡の南方約15m にあたるＸ84～100，Ｙ98～130のごく限られた範囲の小谷から集中して出土した。これは，明らかに１号住居跡から廃棄されたものと見做しうる。これに１号住居跡の出土土器（13・22・30・35）が若干加わる。

以下，器種別にとりあげる。

〔壺〕　２類に分けることができる。頸部が伸びる長頸壺をＡ類とする。これは，頸部が直立するもの（６・７）とやや外反ぎみに伸びるもの（その他）とがある。口縁部の形態には，ａ種：頸部から直立するもの（１・２），ｂ種：頸部から外反して立ちあがるもの（３～６），ｃ種：頸部から外反し，幅広の口縁を複合口縁となすもの（７）との３種がみられる。外面の調整はハケメを基調とするが，ヘラミガキするもの（７）もある。Ｂ類は上記以外の１点（８）で，外反する幅広の口縁部に櫛描擬凹文をめぐらせる。

〔甕〕　２類に分けることができる。口縁が「く」の字状に外反するもの（９～21)をＡ類とし，複合口縁のもの(22～27）をＢ類とする。Ａ類は，口縁が強く外反する14～20が大部分であるが，13のように立ちあがりぎみに外反するもの，Ｂ類に近いもの（21）などバラエティーがある。胴部をとどめる13は，外面をハケメ，内面をヘラケズリ調整している。Ｂ類には，ａ種：外反した口縁をつまみあげたもの（22）と，ｂ種：口縁の内面にも明瞭な段をもつ典型的な複合口縁のもの（23～27）がみられる。29～36は，壺ないし甕の底部を一括した。また，37・38は，甑の底部である。

〔高杯〕　完形品に近いものは39のみである。39は筒状の脚をもち，脚台部には突帯がめぐる。対になる２個の円孔が突帯をはさんでそれぞれ３個所に穿孔されている。脚台端部は肥厚し，浮きあがりぎみに外方へ伸び，外面に段をもつ。63・64も同類である。爾余のもの(40～48)は，口縁部である。外面はヘラミガキを基調とするが，内面はヘラミガキまたはナデにより調整する。

〔器台〕　いずれも破片である。受部（49・50),脚部（54～56）がある。58～62は器台または高杯の裾部である。49は，幅広の口縁部の外面に擬凹線文を施すほかは，ヘラミガキ調整する。

**平安時代**　須恵器・土師器・黒色土器がある。１号住居跡の床面に二次的に設けられた１号穴の覆土中からすべて出土した。大部分は土師器の杯が占め，これに土師器の甕，黒色土器の杯，須恵器の杯が若干量加わる。

土師器の杯はすべて無高台である。内外面ともに丹塗りである（70～74)。器表の荒れている75～80も丹塗りの可能性をもつ。外底面には糸切り痕をとどめる。底部から直線的に外反するもの（79・80）と内弯ぎみに立ちあがるもの(71・74・78）とがある。土師器の甕(66・67)は，「く」の字状に外反する口縁をもち，端部を直立ぎみにつまみあげている。黒色土器の杯（68・69）は，内面をヘラミガキする。このほか、須恵器の無高台の杯底部１点がある。

１号穴から出土したこれらの一括土器は，土師器の杯・甕が入善町じょうべのま遺跡（Ａ・Ｂ地区）〔舟崎1974，橋本・岸本1975〕の出土土器や魚津市佐伯遺跡〔橋本他1979〕出土の新しい一群中のそれに類似することから，平安時代前期，おおよそ９世紀後半という年代観を与えておきたい。　（岸本雅敏）

# 5．第 4 地区

発掘区東半分の地形は，西下がりのゆるやかな斜面で，幅数m，深さ 0.5～1m程の小谷が何条も走っている。これらの小谷は，発掘前の地表観察では，確認できなかったもので，いわゆる埋没谷となっていた。発掘区西半分は傾斜のほとんどない平坦面であるが，小谷の一部が伸びており，かなりの凹凸を有する（図版第10）。

## A　遺　構（図版第10～第12）

本地区で検出した遺構は，竪穴住居跡2棟，穴3箇所，掘立柱建物1棟である。これらは，発掘区のほぼ全体に，散在する（図版第3）。所属時期は，掘立柱建物を除き，弥生時代後期ないし古墳時代初期であるが，掘立柱建物は平安時代に属する可能性もある。

**竪穴住居跡**　1号住居跡は，埋没谷の黒色土層中に築かれていたため，床面と壁の大部分は検出できなかった（図版第11－1）。わずかに，南側壁際の幅約1mの部分と，柱穴の位置を確認しえたのみである。残存部分から推定すると平面形は，隅円方形で，一辺が約8.5mの大きさとなる。柱は4本主柱で，床面からの深さは約1.3mとかなり深い。これは，埋没谷の黒色の覆土をつきぬけ，その下の黄褐色粘土層に柱の底を据えるためのようである。壁際には浅い周溝がめぐる。東側主柱間には，深さ約 0.7mの擂鉢状の穴と，南側壁近くに浅い穴がある。遺物は，住居南西隅から壺類がまとまって出土している（図版12－3・4）。

2号住居跡も一部埋没谷に重複し，そのうえ西側は削平されていて遺存状態は良くない（図版第11－2）。平面形は台形を呈し，一辺が3～4mと推定できる。北側壁際の一部に非常に浅い周溝がみられる。柱穴は確認できず，南側壁近くに浅い穴がある。遺物は細口壺（8）が1個体出土している。

**穴**　発掘区のやや西方よりに1号穴・2号穴の2箇所が，竪穴住居跡の近くに3号穴が位置する。いずれも，床面近くないし，覆土中から土器が出土している。深さは現存0.3～0.4m程である。1号穴は，約2.5m×1.3mの楕円形を呈する（図版第12－2）。　2号穴も1号穴とよく似た形状を示す（同－1）。これも埋没谷の覆土である黒褐色土層中に掘り込まれていたが，土器や炭化物の出土状況と，土のしまりぐあいを手がかりにしてかろうじて検出できた。3号穴は，西半分が削平され，さらに木の根等による攪乱を受けていた。全形を復元するのは困難であるが，方形になるかもしれない。これらの穴は形状及び土器の出土状態などから，土坑墓と考えられる。

**掘立柱建物**　2間×1間の建物で，発掘区のほぼ中央の平坦部に位置する。柱穴の掘り方はほぼ円形で，直径 0.3～0.4mを測る。当建物跡の西方へ10～20m離れた地点から，平安時代の土器群が出土しているので，平安時代に属する可能性もある。

## B　遺　物（図版第24～第31）

遺物は土器類が中心で，発掘区のほぼ全域から出土している。時代は縄文時代から平安時代にわたるが，全体量の95%以上を弥生時代後期ないし古墳時代初期の土器が占める。これらは，竪穴住居跡や穴の覆土及びその周辺から主として出土している。遺構出土の土器は別に掲げておいた（図版第24）が，説明では包含層出土のものと一括して行うことにする。

**縄文時代**　土器は，各時期のものが少量ずつ出土している。簡単に時期比定しておくと，91は木目状撚糸文で中期初頭，92～95は同一個体で中期中葉，96は中期後葉串田新式，97・98は後期前葉気屋式，99～101は晩期後葉となる。石器は蛇紋岩製の磨製石斧（107），有茎の大型石鏃（第3図3），などがある。

**弥生時代中期**　90・102～106などの土器は，いわゆる天王山式〔坪井1953〕である。90は，細かい縄文を施す壺形土器で，口縁部は肥厚して直立し，端部に縄文を施文する。頸部は，復元図よりも少し長くなるかもしれない。

**弥生時代後期～古墳時代初期**　この時期の遺物は土器のみである。以下器種ごとに説明する。

〔壺〕　大きく5類に分けることができる。A類（1・2・9－15～20）は，頸部がやや外反しながらのびる長頸壺である。これは，さらにやや外反しながらのびて終わるものと，口縁部が折れて直立するものに分けられる。9は，肥厚して立ち上る口縁部に，数条の櫛描擬凹線文をめぐらすもので，山陰地方の系統を引く土器である。

B類（4・11・12・21～27）は強く外反した頸部に，直立もしくはやや外反する口縁部のつく複合口縁の壺である。長くのびる口縁部に櫛描擬凹線文を施すもの（4・22）や，頸部に凸帯をめぐらすもの（25・29・30）がある。器表面調整は，A類より丁寧でヘラミガキが多い。C類（8）は，細口壺である。頸部より上を欠くが，胴部はヘラミガキで丁寧に仕上げる。D類（6）は広口壺，E類（5）は無頸壺である。いずれも量は少ない。5の胴部以下には煤状の炭化物が付く。

〔甕〕　口縁部が「く」の字状に外反するA類（13・34～41）と，複合口縁のB類（14・42～52）に分けられる。前者の中には，口縁端部を下方に若干折りまげるもの（13・36～39）が目立つ。40・41は口縁端部をわずかに直立させるもので，B類複合口縁との中間的な形態を示す。複合口縁の甕は，口縁部が直立するもの（42・43・48）、外反するもの（44～46・49・51・52）、やや内弯するもの（14）など，口縁部の形態には様々な変化がある。内面調整は，ヘラケズリが認められるもの（14・40など）も一部あるが，むしろ，ハケメによるものの方が多い（13・34・35など）。

〔鉢〕　口縁部が「く」の字状に外反する。小型の鉢としては，複合口縁のもの（54）や浅鉢状のもの（55）が出土している。

〔甑〕　尖底状になる56がある。数は少ない。

〔高杯〕　全形を復元できるものはない。杯底部が皿状のA類，丸く椀状になるB類（68・69）、小型のC類（70）に分類できる。A類には口頸部が外反しながらやや長くのびるもの（65）と，口頸部が短く直線的なもの（62・64など）がある。杯底部径が口径の$\frac{1}{2}$以下になるものはなく，概して口頸部の短い形態を示すといえよう。口縁端部が，外側（65）や，内側（66）に肥厚するものも若干あるが，量は少ない。71～78は高杯あるいは器台の脚である。

〔その他〕　以上の他に，器台（79～82）、蓋（84）、脚部（83）などがある。

**平安時代**　発掘区の南西部からまとまって出土している。85は須恵器壺の口頸部と考えられる。土師器は甕（86），杯（87・88），鍋（89）がある。杯の底部は回転糸切り痕を残す。平安時代前期，9世紀後半頃の実年代を与えることができよう。

砥石（108）は荒い砂岩製で，非常に風化している。時期は不明である。

## C　まとめ

住居跡の平面形は隅丸方形となり円形と考えられる第3地区の住居跡と異なる。また，本地区には第2地区にみられるような円形の穴がなく，これも違いとして認められる。2号住居跡は規模も小さく1号住居跡に付随する建物であろう。楕円形の浅い穴は土坑墓と考えられる。不確実なものを含めてもわずか3箇所しかなく，集落に付属するものとは考えがたい。

弥生時代後期～古墳時代初期の土器については，湯上B遺跡の中でも，本地区が，出土量及び復元できるものの量点数としては最も多い。これらの土器群の編年的位置づけについては，後の総括においてもう一度触れることにする。

（山本正敏）

# 6．第5・第6地区

第5・第6地区の地形は，西側に傾斜し，約10mの比高差を持つ。また，小さな谷が，北東から南西方向に伸びるため，南西側への傾斜も加わる。発掘区南側の中程では，平坦面を持つ高まりがあり，住居跡が存在する(図版第5)。

## A　遺　構（図版第13）

遺構は，古墳時代前期に属する住居1棟を検出した。

住居跡は，微高地状の平坦面に，地山を掘り凹めてつくっている。平坦面の広さは，10×10m程度で，標高は67mを測る。平坦面と周囲との比高差は，約1mある。

平面形は，方形を基本とするが，北西隅が突出するため，台形に近い。規模は，3m×4m，5m×4mで，壁高は0.2m～0.3mを測る。床面は，砂礫層を掘り凹めてつくるため，凹凸があったらしい。これを平らにするため，大部分を貼床としている。穴は，東壁側に片寄りがみられる。穴の平面形は，円形で直径約40cm，深さ約40cmである。住居跡中程で，貼り床面の下から穴が検出された。平面形は，楕円形で0.75m×0.65m×0.41mの規模を持つ。穴の覆土は，単層で，住居跡内覆土②層に近い黒褐色粘質土である。この穴は，貼り床面形成前の穴で，性格，用途などは明らかに出来なかった。住居跡内の穴は，これら二箇所だけで，他にはみられない。また，焼土もみられない。

住居跡内の遺物は，数個体まとまって出土しただけである。

本住居跡の特徴などをまとめると，以下の様になる。(1)主柱穴は不明である。(2)住居跡中程に性格不明な穴がある。(3)床面積は約16㎡と小規模である。(4)出土遺物が少なく丹塗り土器が多い。(5)高杯・器台・小型壺形土器のセットである。(6)炉がみられない。

（橋本正春）

## B　出土遺物（図版第16・第17）

縄文時代の土器・石器，古墳時代の土師器が少量ある。土師器は，主に1号住居跡から出土した。

**縄文時代**　打製石斧と石棒が各一点ある。石斧（80）は，バチ形を呈する完形品である。刃部近くに擦痕をもつ第6地区での表採遺物である。石棒（81）は，基部の大半を欠く破片である。敲打整形によって頸部を作り出している。頸部以下，基部に向って太くなる。横断面は長楕円形である。中期後半ないし後期にかかるものであろうか。黒色土中からの単独出土品である。ほかに時期を判別しがたい縄文土器の破片が数点ある。

**古墳時代**　小形の壺(3)は，いわゆる小形丸底坩である。丸底の小さな体部に外反する口縁部をもつ。体部と口縁部の高さの比は，3(3.2cm)：4(4.2cm)，体部の最大幅と口径の比は，2(6cm)：3(9cm)で，体部に比して大きな口縁部をもつ。外面全体と口縁部内面に丹塗りし，後者には横方向には丁寧なヘラミガキがみられる。高杯(4)は，口縁部と脚の裾部を欠く。杯部外面にわずかにハケメが，脚部外面にはヘラケズリを施す。小形の器台（5）は，椀形の小さな受部に裾広がりの高い脚部をもつ。6は器台の脚部である。外面には，丹塗りを施す。大きく「ハ」の字形に裾の広がる低い脚部に，5と同様，小さな椀形の受部がつく器種である。上記の3～6は，いずれも1号住居跡の出土土器である。このほか，甕の口縁部（7）が一点ある。口縁部は，頸部から「く」の字状に外反して立ちあがり，複合口縁となす。

1号住居跡から出土した上記の土器は，吉岡康暢氏による北陸地方の土師器の編年〔吉岡1967〕と対照すれば，その第2様式に該当し，古墳時代前期の後半，おおよそ4世紀の後半代という年代を考えることができる。この時期の土器は，富山県下では，高岡市赤祖父遺跡〔上野1972〕などにごくわずか認められるのみで，なお出土例の乏しいものである。なお，住居跡外出土の甕の口縁部（7）は，上記のものより古く，第1・3・4地区の出土品と同じく，弥生時代終末期のものである。

（岸本雅敏）

# 7．総　　括

湯上Ｂ遺跡の報告のしめくくりとして各時代ごとに調査の成果と問題点を整理しておくことにする。

## Ａ　縄文時代～弥生時代中期

湯上Ｂ遺跡の各地区からは，縄文時代前期後葉から弥生時代中期にわたる土器が出土している。これらは各時期数個体からせいぜい十数個体の量である。また住居跡や穴などの遺構も検出できなかった。この様な遺跡のあり方は，東京都多摩ニュータウン地内の縄文時代遺跡で行った小林達雄氏の分類に従うならＤパターンとすることができる〔小林1973〕。Ｄパターンは住居跡などの遺構はほとんどもたず，数個体程度の土器を残すだけの遺跡である。本遺跡もおそらく狩猟・採集のための一時的な居住地か，仕事場と考えられる。どの時期においても，この場所は人々が生産活動を行ったりするのに好条件をそなえていたに違いない。　（山本正敏）

## Ｂ　弥生時代後期～古墳時代初期

### (1)　土器の編年的位置

北陸の弥生時代終末期から古墳時代初期の土器編年は，最近，石川県塚崎遺跡出土の豊富な土器資料の分析をもとに，塚崎Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ式に区分する案が示されている〔吉岡他1976〕。これによると，塚崎Ⅰ式は，石川県羽咋市柳田遺跡の溝内出土の一括資料を標式とする柳田式〔谷内尾1973〕に対比でき，富山県内では，高岡市下佐野遺跡〔上野1972〕・小杉町囲山遺跡〔橋本1970〕出土土器に類似するとされている。また塚崎Ⅱ式は，いわゆる北陸土師器第１様式〔吉岡1967〕のうちでも前半期に位置づけられるもので，富山県小杉町中山南遺跡出土土器などに対比される。塚崎Ⅲ式は石川県金沢市月影遺跡出土資料を標式とする月影式〔浜岡・吉岡1962〕に類するもので，北陸土師器第１様式のうち後半期を占めると考えられている。

さて以上の編年を参考に湯上Ｂ遺跡出土の土器群を検討することにする。まず出土状況であるが，図版第24に揚げたもの以外，その多くは住居跡周辺の谷部などから出土したものである。これらは大きく分けて３地点から出土している。すなわち，第１地区の北東部，第３地区住居跡・穴の覆土とその南側の谷部，それに第４地区の住居跡・穴とその周辺である。この３群を比較してみたが，全形を復元できる個体が少なかったこともあって，それぞれに明瞭な差異を見いだすことができなかった。現時点ではとりあえず，一括して取り扱わざるをえないと考えられる。

次に主な器種についての特徴をみてゆきたい。壺ではいわゆる長頸壺の類が目出つ。４地区－１（以下地区を省略）に代表されるように，やや外反しながらのびる頸部に，球状に近い胴部が付く器形は，柳田遺跡出土土器に似る。また細口の長頸壺になる４－８・１－２などは，塚崎Ⅰ式期に多くみられるものである。一方，小型の壺4-11は氷見市大境洞窟出土品に類品があり，４－４などとともに塚崎Ⅱ式期以降に下がるものとみられる。４－９は先にも述べたが，土坑墓と考えられる第４地区１号穴から出土しており，山陰地方の影響を受けた土器である。

甕は複合口縁のものと，「く」の字形に外反するものの両者がある。塚崎Ⅲ式に比定できるものはみあたらず，これらの土器群の下限は限定できそうである。塚崎遺跡の報告で述べているように，塚崎Ⅰ式から同Ⅱ式にかけての甕の形態変化は漸移的であり，当遺跡においても区分はむずかしい。

甕内面の調整に，ハケメを用いるものが目立つようである。（1－19・3－22・4－13・35・42など）。このことは，塚崎Ⅰ式に比べてⅡ式以降にヘラケズリが多くなるという指摘〔吉岡他1976Ｐ219－220〕を考慮すると興味深いものがある。しかし，ほぼ塚崎Ⅰ式期に対比できる上市町江上Ａ遺跡〔岸本他1982〕では圧倒的にヘラケズりが多いことを考えると，単純な図式では理解できず，より細かな地域と時間の中で位置づけることが必要である。

続いて高杯についてみると，口頸部は，外反しながら長くのびるものはなく，3-44・46・4-65のように杯底部と口頸部の長さの比率が１：１程のものが一部あるだけである。3-39は口縁部を除きほぼ全形を知ることのできる唯一の

ものである。端部が肥厚反転する棒状有段脚の形状から塚崎Ⅰ式期にさかのぼる可能性が強い。一方，杯部が丸く椀状になる3-40・4-68・69などは塚崎Ⅱ式に含めて考えてよいであろう。高杯をみるかぎり，塚崎Ⅰ式からⅡ式の両期にまたがるものと考えられるが，中山南遺跡等にみられるような口頸部が長くのびる形態のものがなさそうなので，塚崎Ⅱ式期でもその前半期に限られそうである。

以上述べてきたことを塚崎編年にあてはめて位置づけを行なうと，本遺跡の弥生時代終末期から古墳時代初期にかけての土器群は，若干の時間幅をもち，その中心時期を塚崎Ⅰ式期の後半期におきながら，一部塚崎Ⅱ式期にさがるものも含むと見ることができよう。

富山県東部地域においても，魚津市佐伯遺跡〔橋本他1979〕や，滑川市魚躬遺跡〔橋本他1973〕など弥生時代後期から古墳時代初期にかけての遺跡調査例が増えてきており，地域色や，編年の確立・細分の問題なども序々に明らかになってゆくものと考えられる。

（山本正敏）

**(2) 遺跡のあり方と性格**

標高約70mの高位部に立地するこの遺跡が，弥生時代の遺跡でもあったこと，しかも少数とはいえ住居跡を伴っていたことは，注目に値する。以下，この遺跡の評価をめぐって，若干の問題を捉えてみたい。

序章でもふれたとおり，湯上B遺跡の総発掘面積は，約27,000㎡にも及ぶ。このような広大な面積を発掘調査したにもかかわらず，検出された住居跡は，第6地区の古墳時代の1棟を除けば，第3地区で1棟，第4地区で2棟，合わせてもわずか3棟にすぎない。[註1]

遺跡内での住居跡のあり方を要約すれば，おおよそ次のとおりである。すなわち，(A)，標高60mないし70mの高位の丘陵上に立地する。これは，平野部との比高差でいえば，40mないし50mである。(B)，きわめて広範囲のうちに，少数の住居跡[註2]が，1箇所にまとまることなく存在する。[註3]すなわち，第3地区では1棟が単独に存在し，第4地区では2棟が比較的，至近距離に存在する。(C)，住居跡の周辺には，穴などの付属的な遺構がみられる。(D)，住居跡では，かなり多量の土器が使用され，近くに廃棄されている。とくに第3地区では，廃棄の場所が，一定の場所にほぼ限定されている。

さて，上記の(B)からも明らかなとおり，この遺跡は，「集落遺跡」とは素直に呼びがたい特異なあり方を示している。また，高位部に立地するという(A)の立地条件から，この遺跡を，いわゆる高地性集落とただちに結びつけることには，なお慎重でありたい。ただ，(A)の立地条件，(B)のあり方からすれば，少くとも5棟前後の竪穴住居のまとまりから成る，農業生産（水稲耕作）に基礎をおいた一般的な集落遺跡[註4]とはおそらく区別され，また性格もやや異にするものであろうと言える。しかし，だからといって，これを単純に「キャンプサイト」として片づけることは，弥生時代終末期[註5]というこの遺跡の時代性を考慮すれば，できないであろう。仮にそうでありえたとしても，狩猟・採集経済であった先土器・縄文時代のそれとは，性質を異にしていたはずである。

一方，多量の土器の消費と廃棄という(C)の事実は，住居跡の利用が一回性のものではなく，その場において一定期間の居住がなされたことを示している。それでは，左記の「一定期間の居住」は，生産活動においても自立性をもった「定住」と言い換えることができるだろうか。この時期には，沖積平野に面する微高地ないし台地上に，農業生産に基礎をおいた集落がこの地域でもすでに成立していたことは，十分考えられることである。事実，遺跡の西方1.3kmの台地上（標高25m）には，ほぼ同時期の佐伯遺跡〔橋本他1979〕が存在しており，この推定をある程度裏づけている。このような弥生時代の終末期において，農業生産から遊離したかたちでの生産的自立性をもった定住を想定することは，一般的にいってむつかしいであろう。だとすれば，住居跡の居住者は，おそらくこの地域でもゆるやかに形成されていたと考えられる農業共同体的な諸関係から，まったく隔絶された孤立的存在ではありえなかったと推察される。

以上のような推論に基づいて，この遺跡の評価として，二とおりの見方が成りたちうると考える。すなわち，その一つは，この遺跡に形成された住居跡は，農業生産を基礎とする低地の集落，いわば「母村」から離れて，定期的ないし不定期的な居住が一定期間くり返された結果を示すものという理解である。つまり，居住者は，その帰属する「母村」の成員としての立場をなお保持しつつ，「母村」との集団関係のもとに一定の機能と目的をもってその領域内に形成された“派生的な”住居にすまいしていたと考えるのである。上記の機能と目的について，ここでは明言できないけれども，「母村」での生産と消費から生じる不可欠な諸労働，例えば，建築材や木製農耕具材などの資材の獲得，あるいは農作物の不足を補完する狩猟・採集活動などを行う上での，拠点的住居を想定できるかもしれない。[註6]

他の一つは，３棟の住居が同時期に併存していたという前提に立って，これらが，農業経営と消費の最小の単位としての「単位集団」〔近藤1959〕を構成していたとみる考えである。この場合，三つの住居は，血縁的関係をもった世帯からなる「世帯共同体」〔都出1970〕あるいは「家族集団」〔高倉1975〕を形成していたと見做しうるわけであり，これを単位として，丘陵下の角川（かどかわ）の谷水田の経営が行われたと推定できる。このような理解に立てば，この遺跡は，佐原真氏のいう「継続型集落」に対する「廃絶型集落」〔佐原1975〕，あるいは田中義昭氏のいう「拠点型集落」に対する「周辺型集落」〔田中1979a. b〕の範疇に包括しうることになる。とすれば，遺跡の形成は，この「拠点的集落」つまり「母村」からの「分村」という道すじをとったと考えることができる。この地域の歴史的環境に即していえば，拠点型集落として，具体的には，先にふれた佐伯遺跡をその候補として挙げうるであろう。

以上，二つの捉え方を並記したのは，この遺跡をはたして最小の「単位集団」として措定しえるか否か[註7]というこの一点に関して，現時点では結論を保留せざるをえなかったためである。今後，こうした遺跡例の増加を俟って再論したいと思う。

（岸本雅敏）

註１　遺跡の立地する丘陵は，自然地形を活かした畑地として開墾されており，後世の土地利用による遺構の消滅はあまり考慮する必要はないと思われる。したがって，本文中に示した住居跡数は，遺跡形成時の実数にほぼ近いと考えてよい。

註２　このような遺跡のあり方は，小林達雄氏が縄文時代の遺跡をＡ～Ｆの六つのパターンに分類された〔小林1973〕そのＣパターンに近いものである。しかし，遺跡の評価にあたっては，弥生時代という時代性をふまえて，別な意味づけを与える必要がある。

なお，遺跡のあり方において湯上Ｂ遺跡に最も近い型をもつのは，富山県下では，小矢部市の平桜川東遺跡〔伊藤1980〕である。湯上Ｂ遺跡とほぼ同時期のこの遺跡においても，丘陵の尾根上と裾部から計２棟の住居跡が検出されているにすぎない。弥生時代の終末期に，こうした形態をとる遺跡の拡散現象が生じ，結果として遺跡数が増加していることは注目される。

註３　このように３棟の間には，遺構の切り合い関係はみられず，したがって遺構からその新旧は確認できない。また，出土土器からも，現時点での分析では，新旧を明確にしえていない。３棟の住居がある時点では併存していた蓋然性があることを指摘するにとどめておきたい。

註４　具体的な例を示せば，例えば岡山県津山市沼遺跡では，台状の丘陵上から５棟の竪穴住居が半円形をなして検出されている〔近藤・渋谷1957〕。近藤義郎氏は，これら５棟の住居から成る小集落を「単位集団」と呼び水稲耕作の経営と消費の最小の単位と捉え，またこれを共同体を構成する基礎的単位と理解している〔近藤1959〕。その後，高倉洋彰氏は，沼遺跡に代表される５棟前後の住居からなる単位集団が，西日本にかなり普遍的にみられることを実証するとともに，これを「家族集団」と理解している〔高倉1975〕。

註５　筆者は，吉岡康暢氏のいう北陸地方土師器第１様式〔吉岡1976〕すなわち塚崎Ⅱ・Ⅲ式〔吉岡1976〕の段階は，まだ古墳時代ではなく，弥生時代後期（畿内第５様式）に後続する弥生時代の終末期と基本的には考えているので，本文中では一貫して「弥生時代終末期」と表現した。なお，この点については，調査報告者三名の間で，見解の統一をはかりえていないことを明記しておく。

註６　こうした推定のほかに，この遺跡が眺望のすぐれた丘陵上に立地する点を積極的に評価すれば，――高地性集落と結びつけることに慎重な立場をとることとやや矛盾するけれども――，近藤義郎氏が，岡山市の高地性集落，貝殻山遺跡について想定された「内外の集団の動きに対する見張り通報」〔近藤・小野1979〕などの機能も，あるいは考えられるかもしれない。

註７　自ら調査した沼遺跡の成果に基づいて「単位集団」を概念化された近藤義郎氏は，近年，岡山市の高地性集落，貝殻山遺跡を調査され，検出された住居址群から，「二～三ないし四～五軒の同時期住居からなる単位集団（傍点筆者）」〔近藤1974〕を想定されている。この貝殻山遺跡のような高地性集落とか，山間部の小集落では，近藤氏が想定されたような２～３の住居から成る小規模な単位集団も，一方では成立していたのかもしれない。

# Ⅲ 湯上（ゆのえ）C 遺跡

## 地形と地目（第２図，図版第32の上・第33の上）

湯上Ｃ遺跡は，魚津市湯上（ゆのえ）字道割（みちわり）1239他に所在する。遺跡は，丘陵の中段に形成された狭い平坦地上にあり，標高は38～41m を測る。その丘陵の両側には，支谷がみられ，谷底と平担面との比高差は約10m である。遺跡の現状は，水田・畑地であった。

## 調査の経過

当遺跡は，古くから知られていたが，遺跡を含む一帯に北陸自動車道が建設される事となった。そこで，昭和48・49年に，富山県教育委員会による分布調査が実施され，古墳時代の遺跡である事がわかり，推定範囲が示された。その結果をもとに，工事施工前に試掘調査を行い，路線敷内に遺跡が存在するかなどの点を確認する事となった。そこで，富山県教育委員会は，日本道路公団新潟建設局の委託を受け，昭和55年に調査を行った。

調査は，昭和55年5月6日から同月7日の2日間で行った。調査方法は，2m×4mの試掘区を調査対象地内（面積5800㎡）に16箇所設定して調査を実施した。総発掘面積は，128㎡である。

調査の結果層位は，１層耕作土（約25cm），２層地山であった。２層の地山は，赤褐色ないし黄白色の粘質土であり，本来は深い位置に存在する層であった。そこで，地山面は，後世の削平を受けたと判断し，遺物包含層はそのためにとばされたとみた。また，地元の方々からは，機械による開墾を行ったという話しを聞いている。

## 調査結果

調査地区内には，遺構・遺物が検出されなかった。遺跡の大部分が，後世の破壊を受けている。　（橋本正春）

# Ⅳ 宮津（みやづ）C 遺跡

## 地形と地目（第２図，図版第32の下）

湯上Ｂ遺跡の立地する丘陵の東側には，東西幅約 300m の小さな谷が南北に伸びている。谷の東端は，南北に伸びる丘陵によって遮られている。宮津Ｃ遺跡は，この谷のほぼ中ほどの傾斜地に立地している。標高は61m である。調査時点での遺跡の地目は水田であった。基盤整備の実施によって，一帯は段差の大きな雛壇状の水田となっている。

## 調査の経過

この遺跡は，北陸自動車道建設予定地を対象に行った遺跡分布調査によって昭和48年に発見されたもので，ＨＧ14と仮称されていた。今回の調査は，遺跡の範囲と遺構の有無を確認することを目的とした試掘調査である。調査は，日本道路公団新潟建設局の委託を受けて，富山県教育委員会が実施した。調査期間は，昭和55年４月17日から４月21日までの４日間である。調査方法は，重機械を利用して幅約２ｍ，長さ５ｍないし10m のトレンチを道路予定地内に計 23箇所設けた（図版第32）。総発掘面積は830㎡，調査対象面積は約7000㎡である。

## 調査の結果

まず重機械を利用して耕作土を除去したところ，山地にみられる赤褐色の粘質の自然土層（地山）が耕土直下に認められた。また，トレンチの底面を清掃したけれども，遺物包含層や遺構はまったく確認されなかった。更に，数箇所で深掘りを行ったが，下層は自然の礫層であった。なお，出土遺物は皆無であった。

上にふれたとおり，この地域では過去に基盤整備がなされており，その際，旧地形の大規模な改変がなされたため，かって存在した遺跡が消滅したものか，あるいは調査の対象とした道路予定地が遺跡の範囲外であったものか，いずれかであろう。上記の結果から，富山県教育委員会ではこの遺跡の全面発掘調査の要なしとの判断を下した。

（岸本雅敏）

## 参 考 文 献


イ　**伊藤隆三**　1980　『富山県小矢部市平桜川東遺跡Ⅱ』　小矢部市教育委員会

ウ　**上野　章**　1972　「弥生時代　附古式土師器」『富山県史考古編』富山県

**魚津市教育委員会**　1967　『大光寺遺跡報告書』

**魚津市教育委員会**　1971　『魚津市石垣遺跡発掘調査報告書』

キ　**岸本雅敏・山本正敏・酒井重洋**　1976　『富山県魚津市早月上野遺跡第２次緊急発掘調査概報』富山県教育委員会

**岸本雅敏・狩野　睦・酒井重洋・宮田進一・久々忠義・橋本正春**　1982　『北陸自動車道遺跡調査報告書―上市町土器・石器編―』上市町教育委員会

コ　**小林達雄**　1973　「多摩ニュータウンの先住者－主として縄文時代のセトルメント・システムについて―」月刊文化財1973年１月号

**近藤義郎・渋谷泰彦編**　1957　『津山弥生住居址群の研究』　津山郷土館

**近藤義郎**　1959　「共同体と単位集団」考古学研究第６巻第１号

**近藤義郎**　1974　「岡山県貝殻山遺跡」考古学研究第20巻第３号

**近藤義郎・小野　昭**　1979　「２　岡山県貝殻山遺跡」小野忠凞編『高地性集落址の研究　資料編』学生社

サ　**佐原　真**　1975　「農業の開始と階級社会の形成」岩波講座『日本歴史１　原始および古代』　岩波書店

タ　**高倉洋彰**　1975　「弥生時代の集団組成」『九州考古学の諸問題』　東出版寧楽社

**田中義昭**　1979ａ　「南関東の弥生時代集落」考古学研究第25巻第４号

**田中義昭**　1979ｂ　「弥生期における耕地と集落」『日本考古学を学ぶ(３)』　有斐閣

ツ　**都出比呂志**　1970　「農業共同体と首長権」『講座日本史１　古代国家』　東京大学出版会

**坪井清足**　1953　「福島県天王山遺跡の弥生式土器」史林第36巻第１号

ハ　**橋本　正**　1970　『囲山遺跡―小杉町囲山遺跡緊急発掘調査報告書―』富山県教育委員会

**橋本　正・舟崎久雄・上野　章**　1973　『富山県滑川市魚躬遺跡発掘調査報告書』滑川市教育委員会

**橋本　正**　1974　『高速自動車国道北陸自動車道関係埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書―富山市・朝日町間―』富山県教育委員会

**橋本　正・岸本雅敏・山本正敏**　1975　『富山県魚津市早月上野遺跡第１次緊急発掘調査概報』富山県教育委員会

**橋本　正・岸本雅敏**　1975　『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(３)』入善町教育委員会

**橋本　正**　1976　「竪穴住居の分類と系譜」考古学研究第23巻第３号

**橋本　正・上野　章・山本正敏・池野正男・松本幸治**　1979　『富山県魚津市佐伯遺跡発掘調査概報』富山県教育委員会

ハ　**浜岡賢太郎・吉岡康暢**　1962　「加賀・能登の古式土師器」古代学研究第32号

フ　**舟崎久雄**　1974　「第１節　土器（Ａ・Ｂ地区）　第Ⅲ章　遺物　じょうべのま遺跡」『富山県埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』　富山県教育委員会

ヤ　**谷内尾普司**　1973　「柳田うわの遺跡」『羽咋市史－原始・古代編－』羽咋市役所

ヨ　**吉岡康暢**　1967　「北陸における土師器の編年」考古学ジャーナル第６号

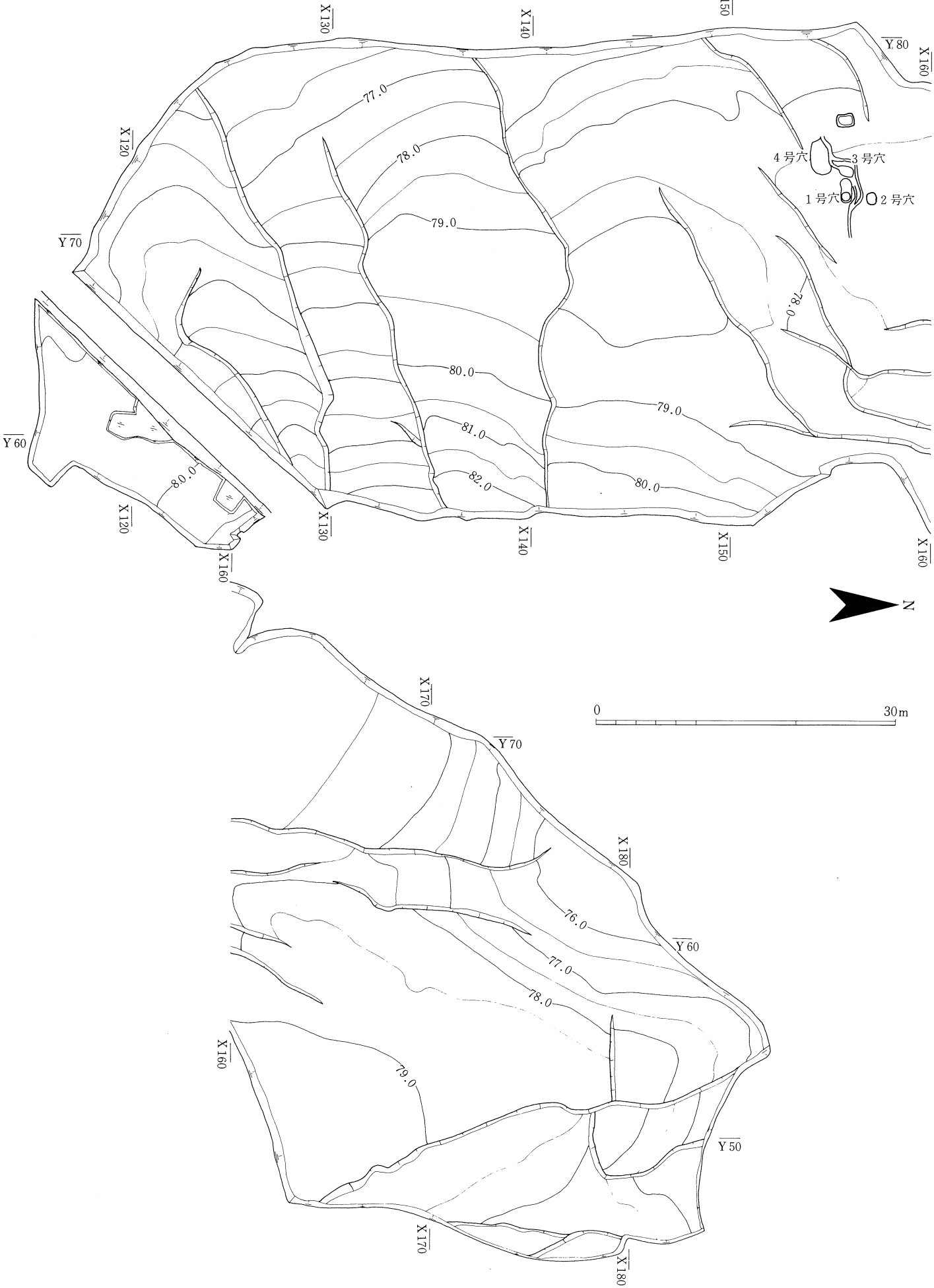
**吉岡康暢・小嶋芳孝・田嶋明人・中島俊一・湯尻修平・河村好光・広岡公夫・藤　則雄**　1976　『北陸自動車道関係埋蔵文化財調査報告書　Ⅱ』石川県教育委員会・石川県北陸自動車道埋蔵文化財調査団

**吉岡康暢**　1981　「珠洲」『日本やきもの集成４』平凡社

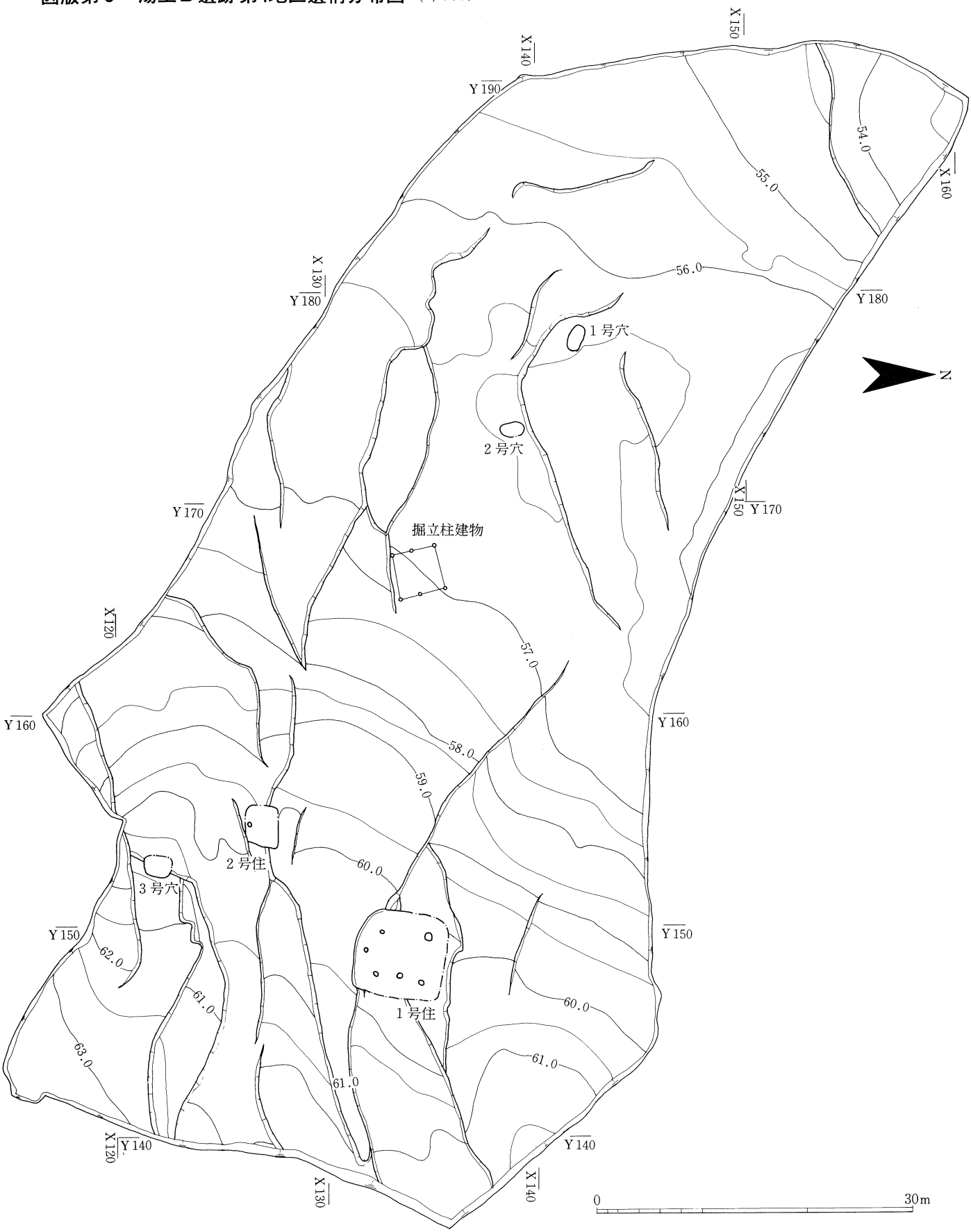
# 図　　版

## 図版第１　湯上Ｂ遺跡発掘全体図 (1/1,750)

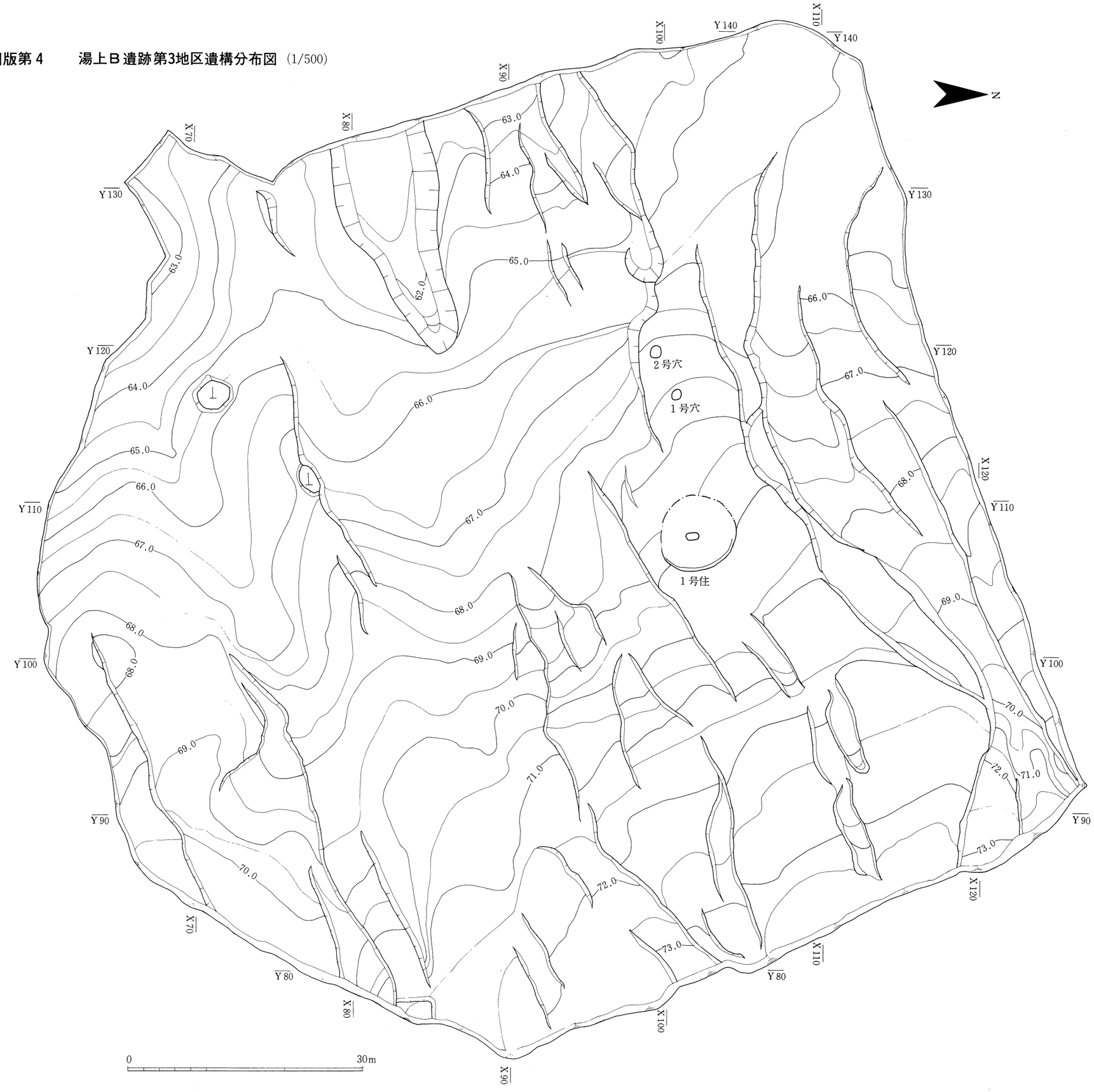
## 図版第２　湯上Ｂ遺跡第1(下)・第2(上)地区遺構分布図 (1/500)



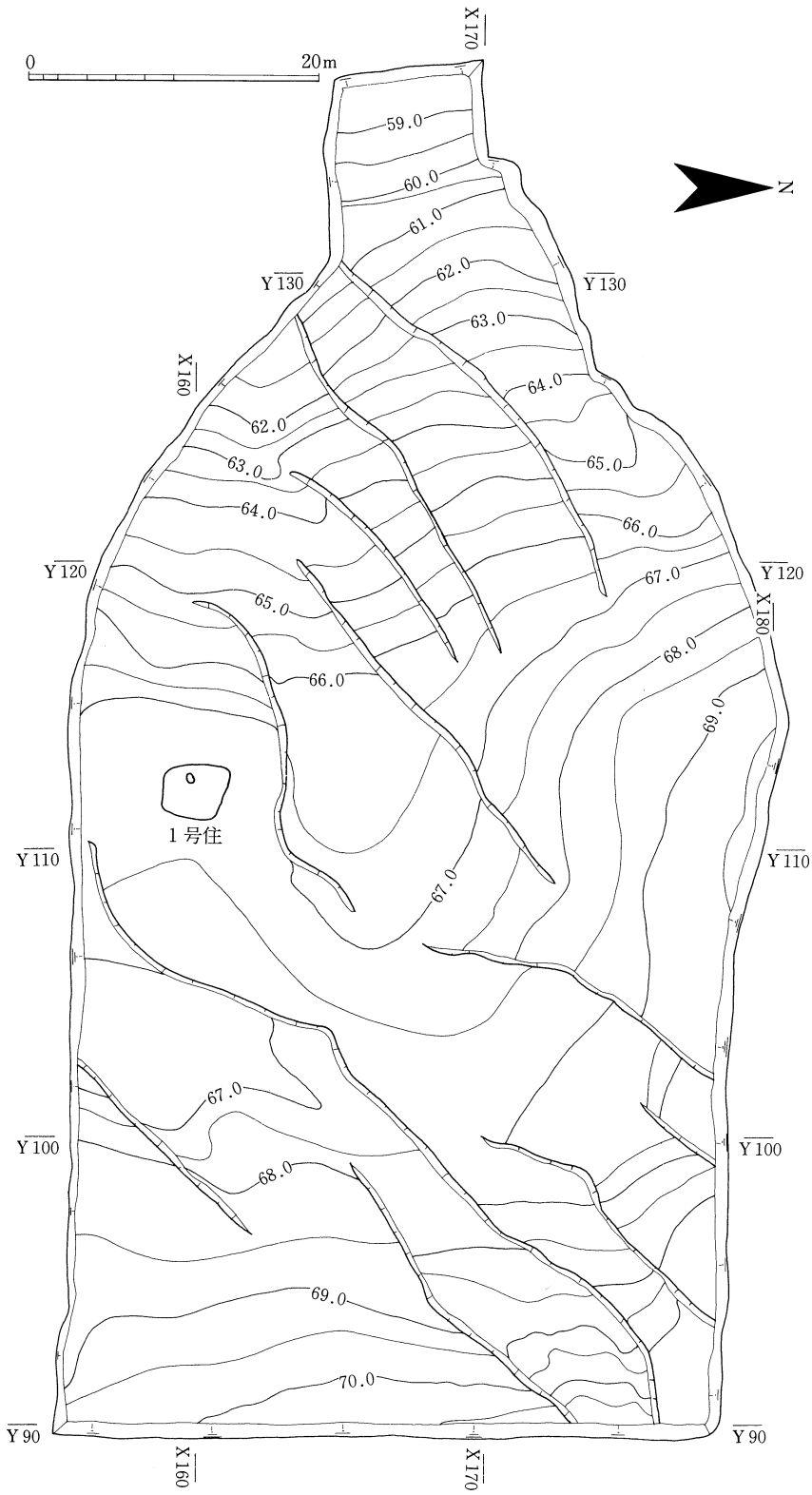
**図版第３　湯上Ｂ遺跡第4地区遺構分布図**（1/500）



図版第４　　湯上Ｂ遺跡第3地区遺構分布図 (1/500)



## 図版第５　湯上Ｂ遺跡第5･第6地区遺構分布図 (1/500)



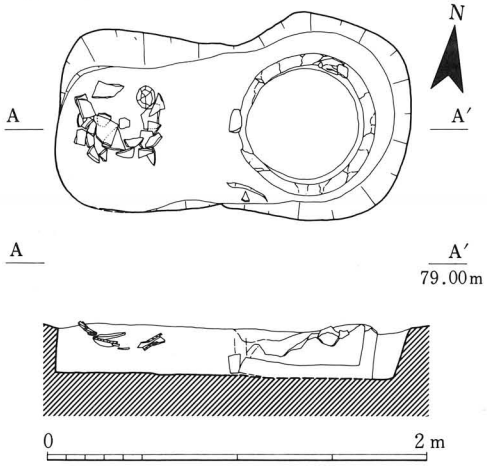
図版第6

1.遺跡遠景

2.第1地区(南から)

3.第1地区

**1号穴** (1/40)



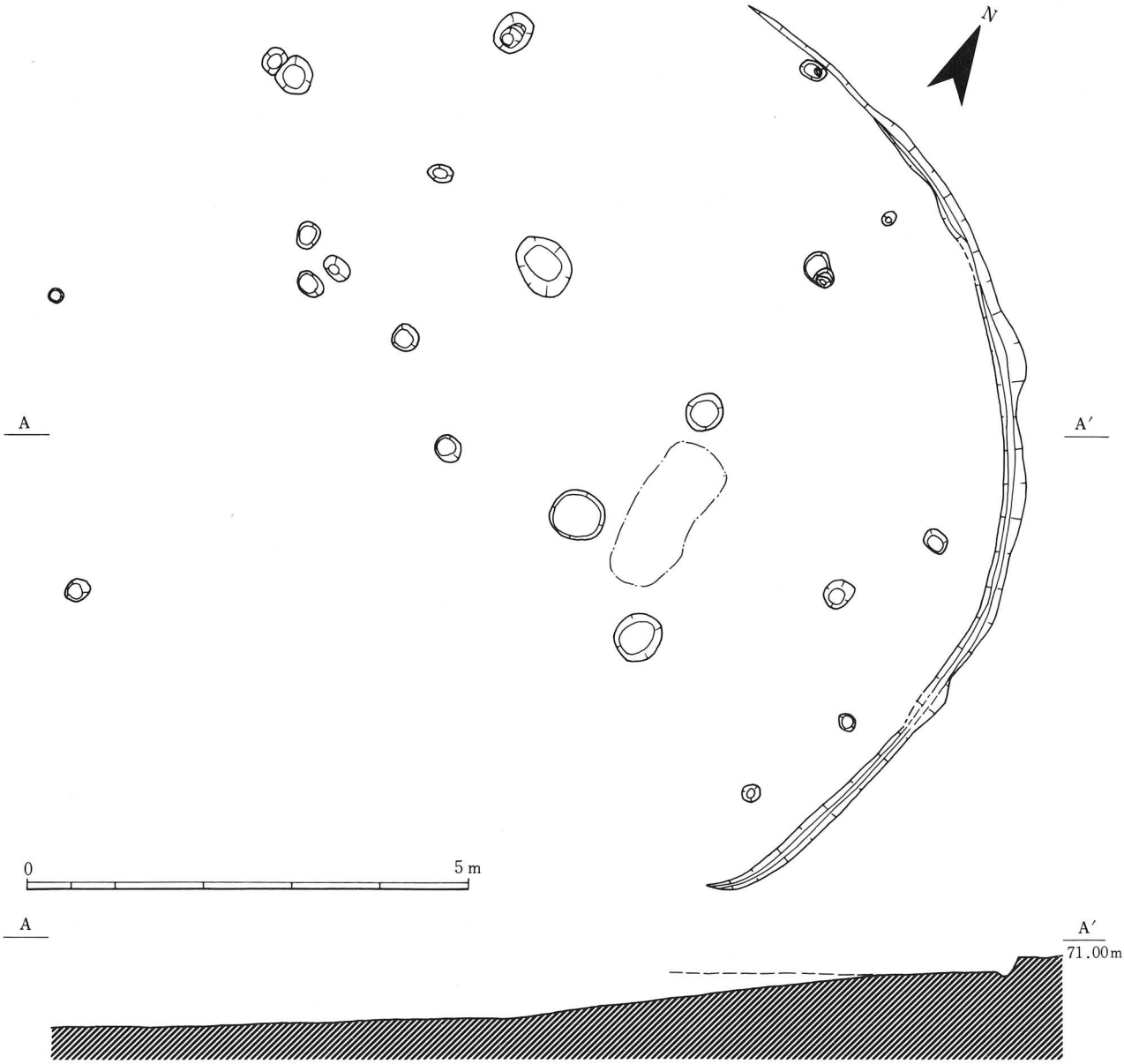
図版第７

1.第２地区全景

2.穴　群

3.１号穴

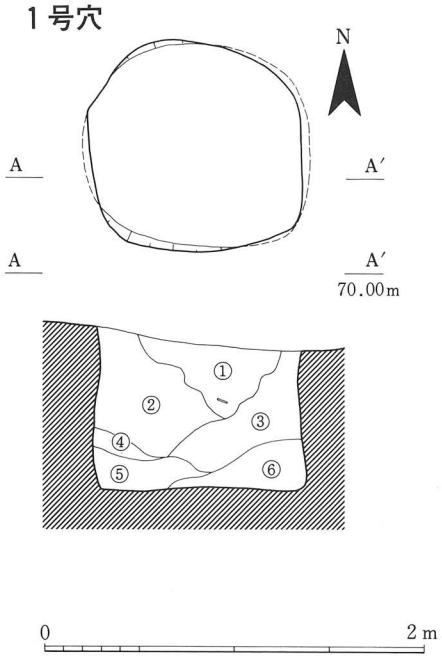
**1号住** (1/75)



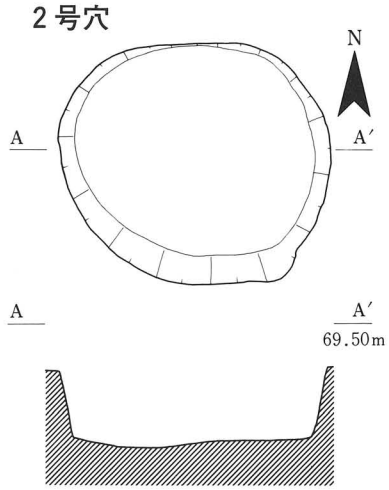
図版第 8

1.第 3 地区全景

## 1号穴



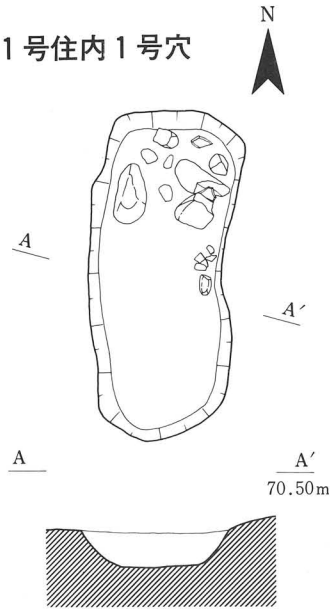

## 2号穴




1号穴　土層説明

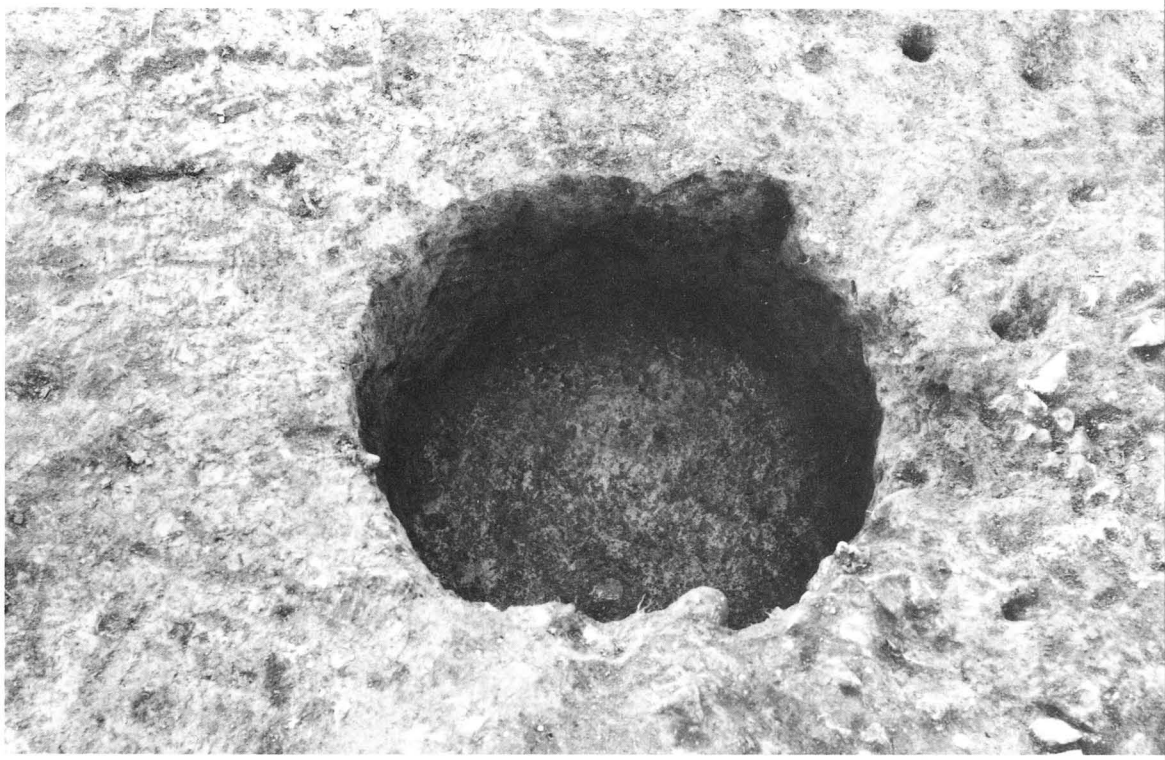
①層　暗黄褐色土
②層　明黒褐色土
③層　黒褐色土
④層　黄褐色土
⑤層　暗黄褐色土
⑥層　明黄褐色土

## 1号住内1号穴

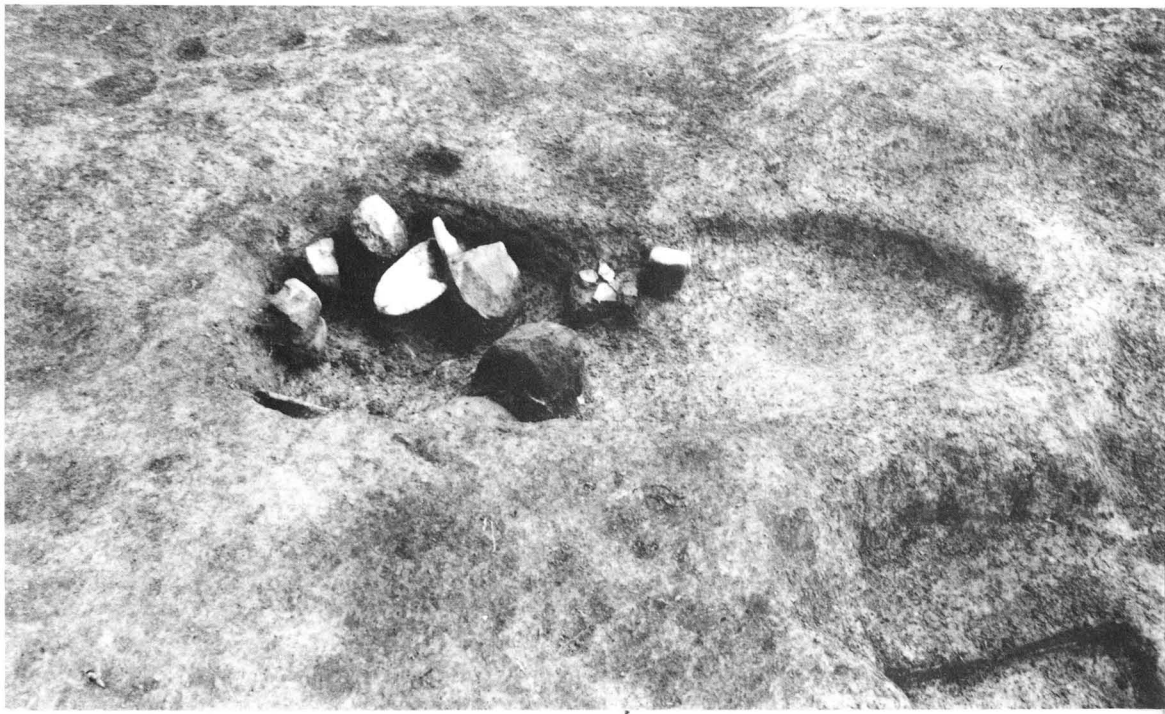


図版第9

1.第3地区1号住



2.1号穴



3.1号住内1号穴

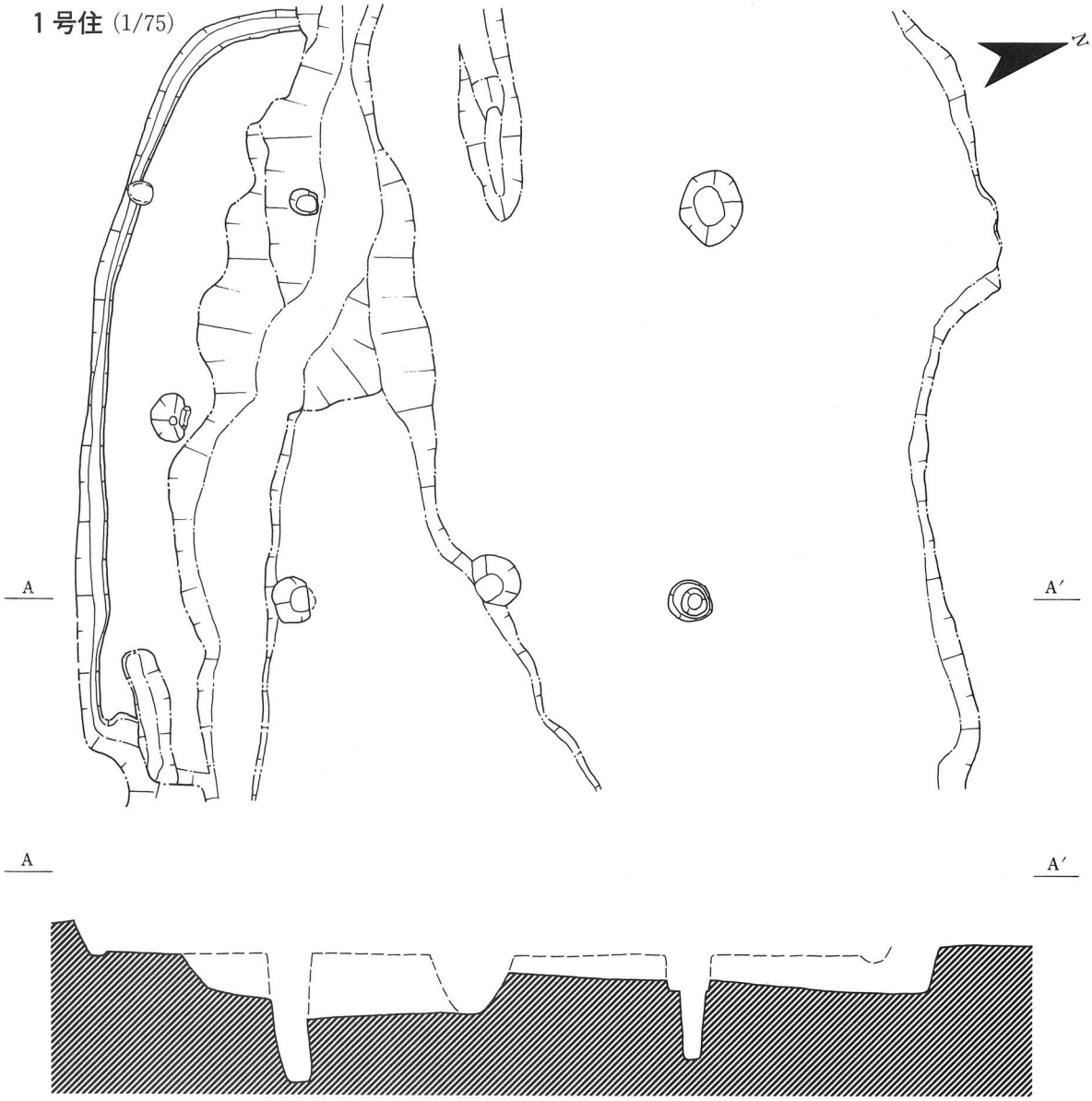
図版第10

1.第４地区全景

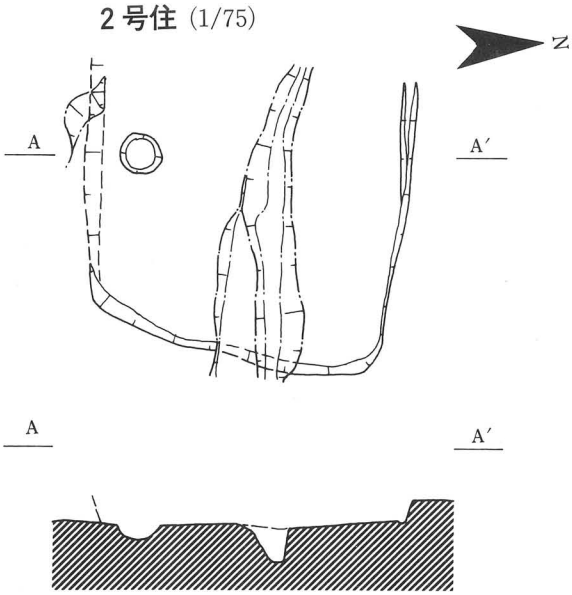
2.第４地区南半部

3.第４地区全景

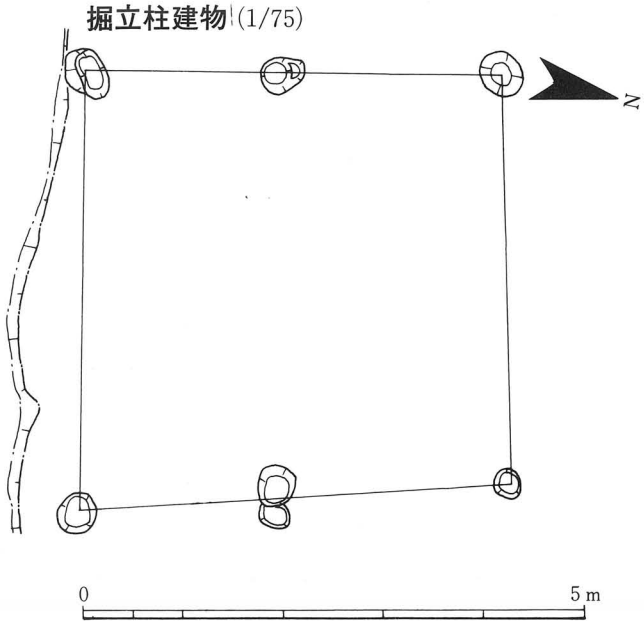
1号住 (1/75)




2号住 (1/75)

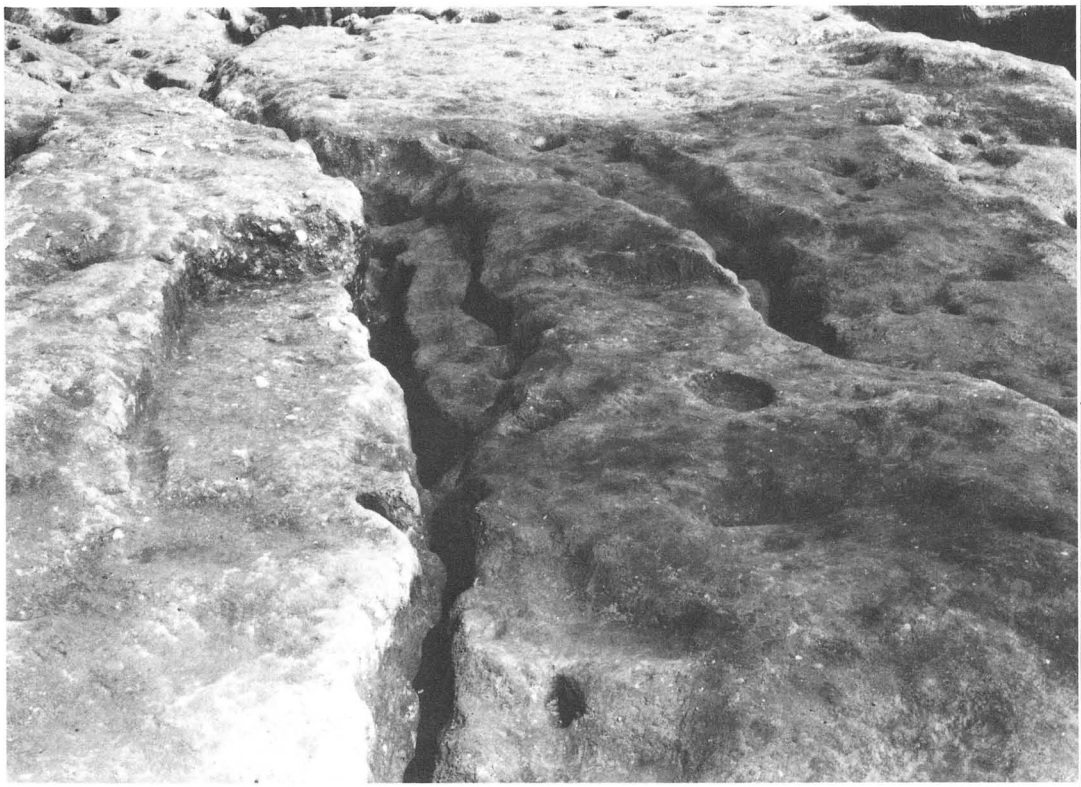



掘立柱建物 (1/75)



図版第11

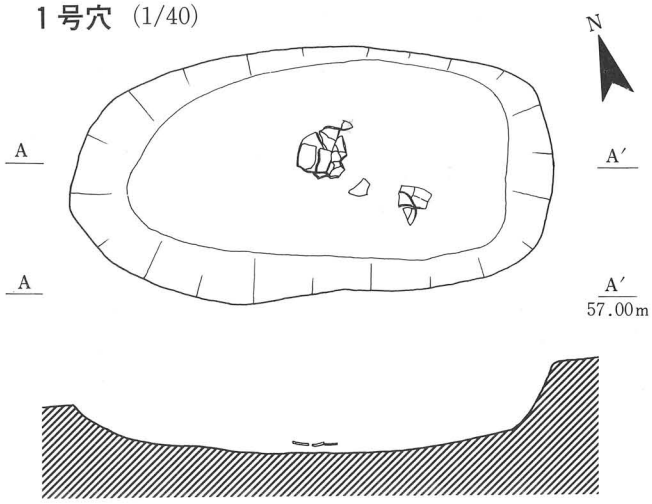
1.第４地区１号住



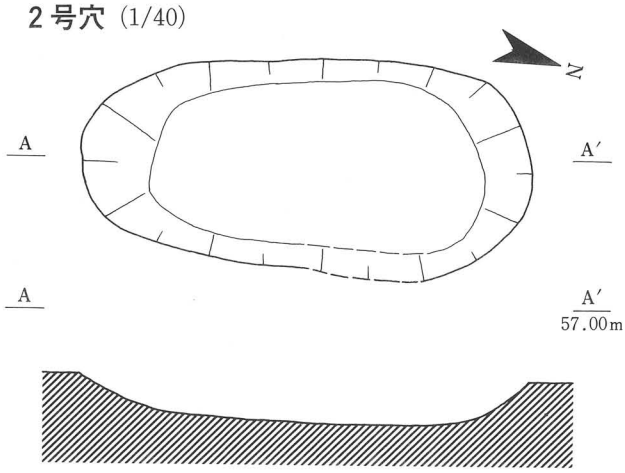
2.２号住

3.掘立柱建物

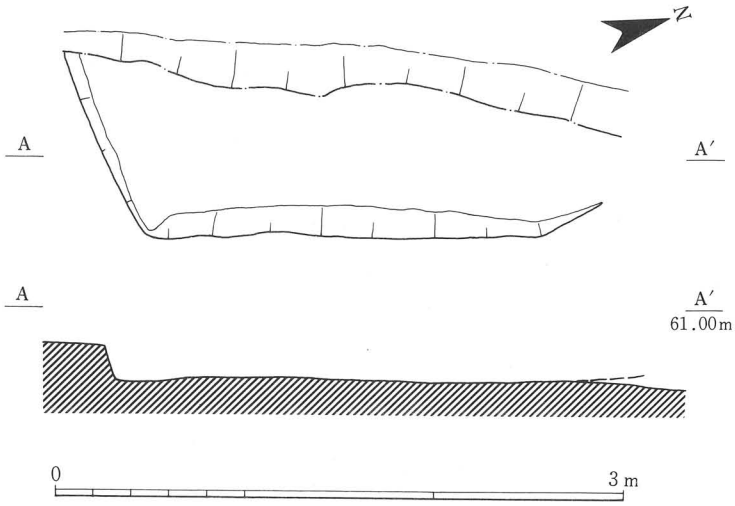
1号穴 (1/40)




2号穴 (1/40)

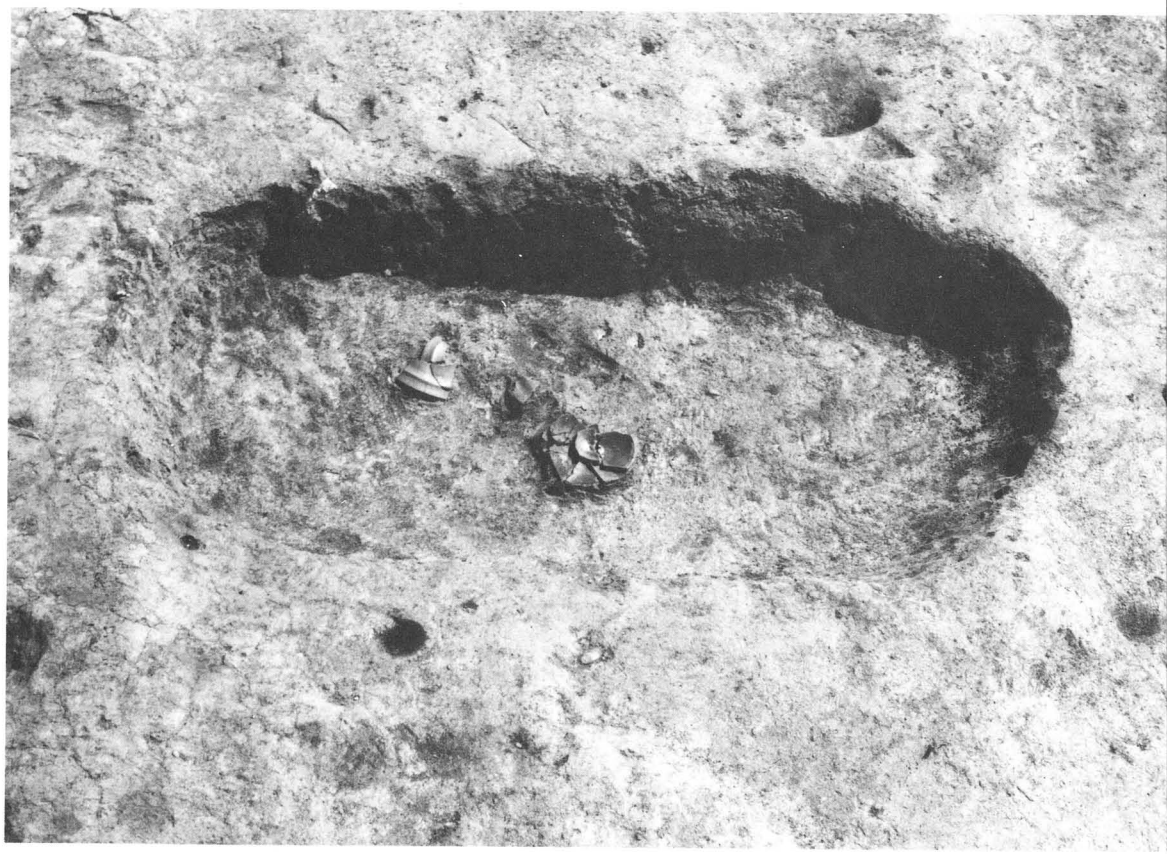



3号穴 (1/40)

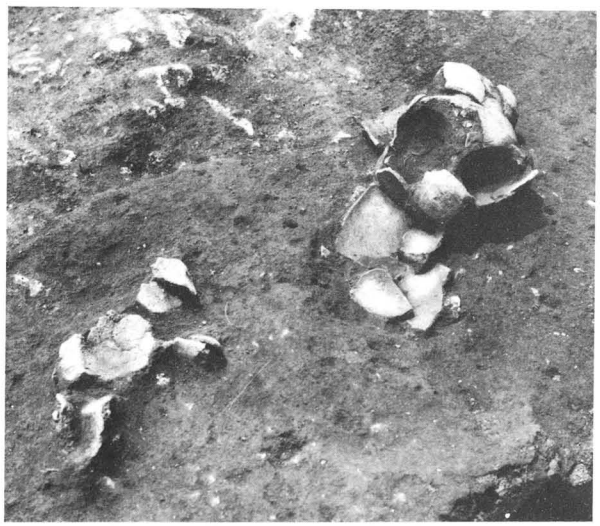


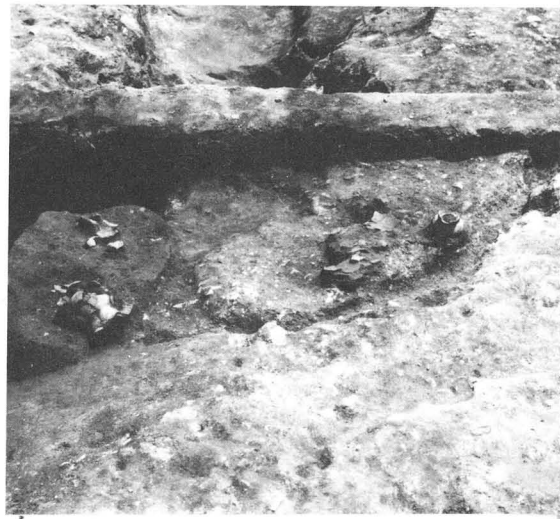
図版第12

1.第４地区２号穴



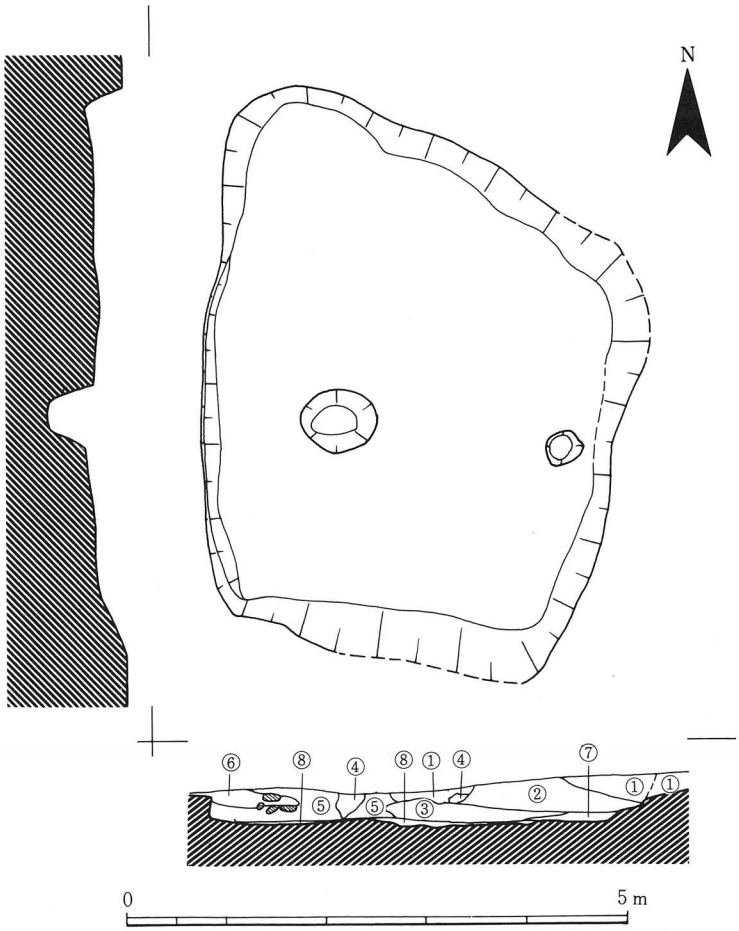
2.１号穴





3.4.１号住
土器出土状況

## 1号住 (1/75)




土 層 説 明

① 攪　乱　層
② 黒褐色粘質土　小石多い
③ 〃　〃　小石を含まない
④ 黄褐色粘質土　粘土を含む
⑤ 褐色砂利層
⑥ 黒褐色砂利層　石多い
⑦ 黒色粘質土
⑧ 黄褐色粘質土　張り床

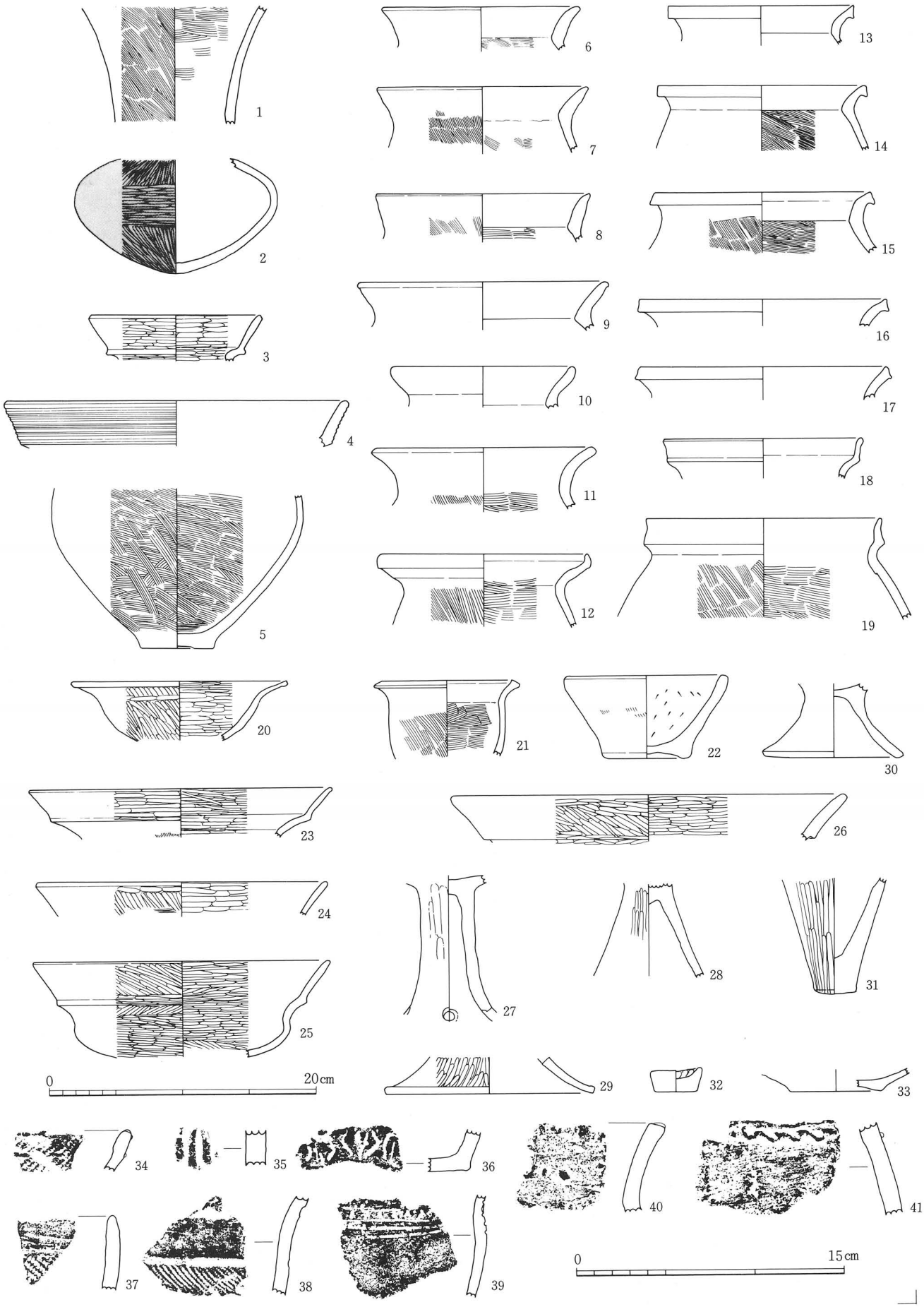
図版第13

1.第5･第6地区全景

2.第5･第6地区全景

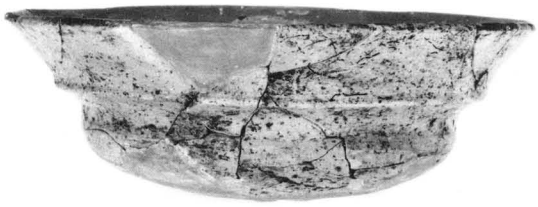
3.1号住

## 図版第14　湯上B遺跡第1地区（1～33・1/4, 34～41・1/3）

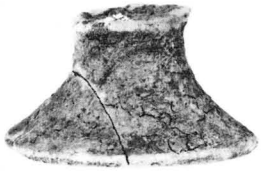


図版第15

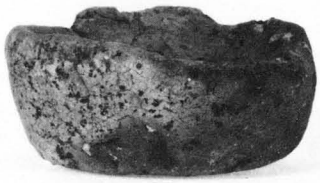
2



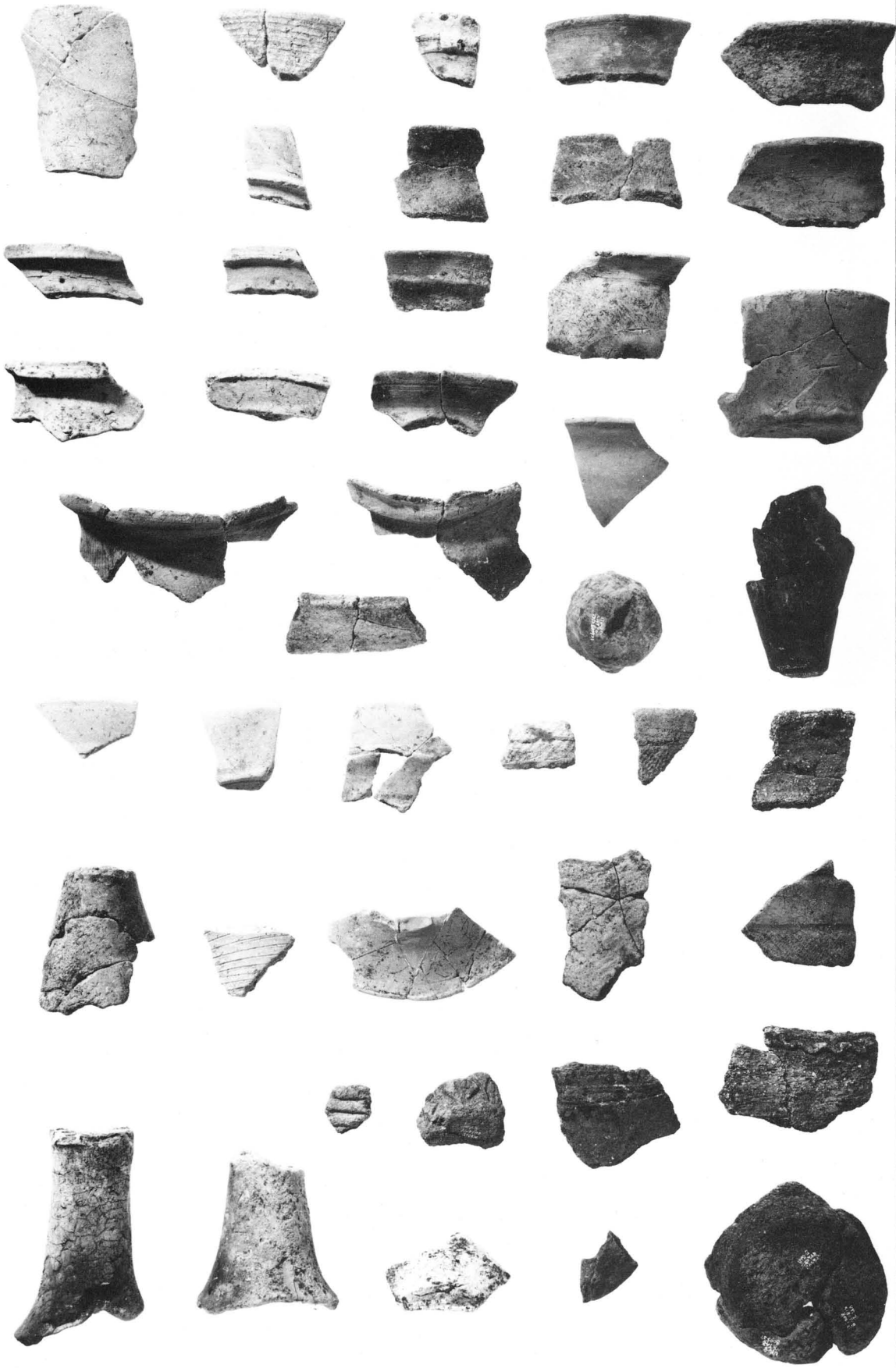
25



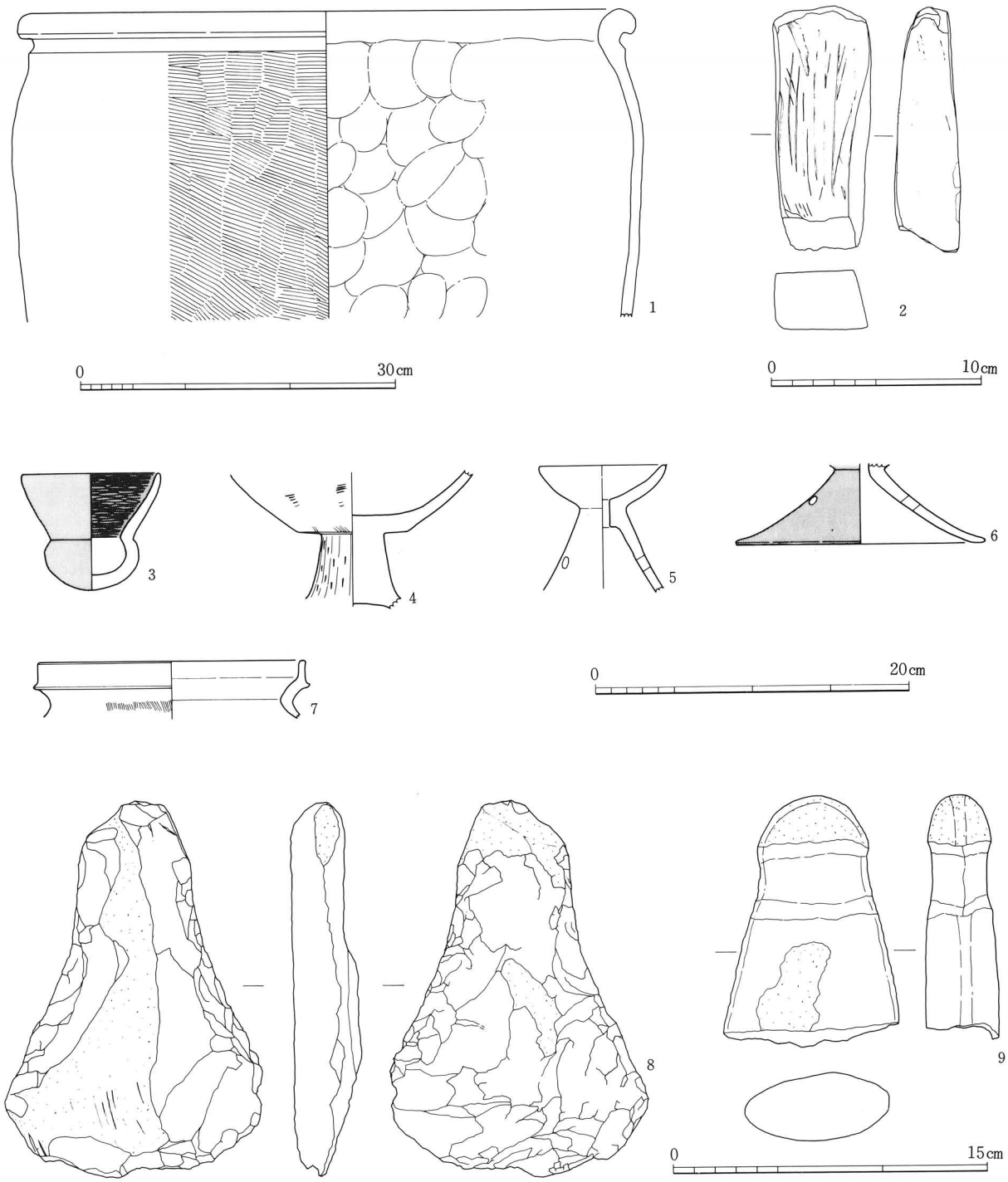
30



32

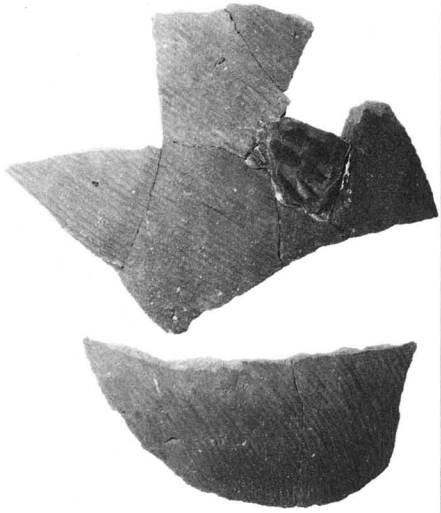


**図版第16　湯上Ｂ遺跡第2地区**（1・1/6, 2・1/3）　**第5・第6地区**（3～7・1/4, 8～9・1/3）

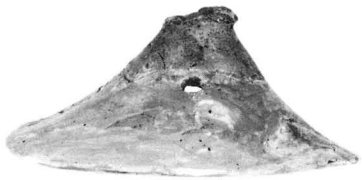


図版第17

1

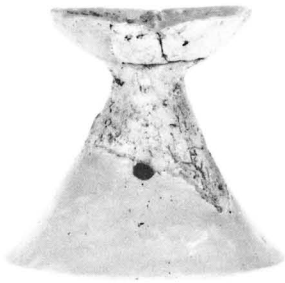


3

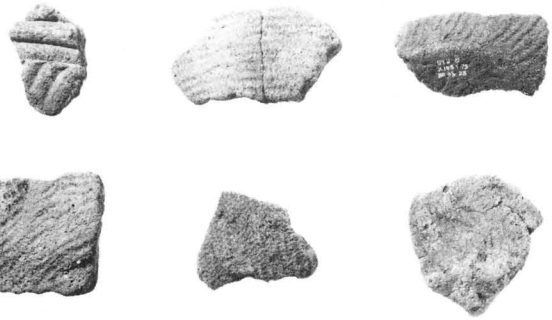


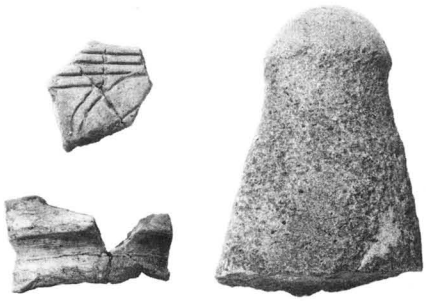
6

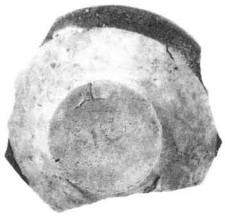
4

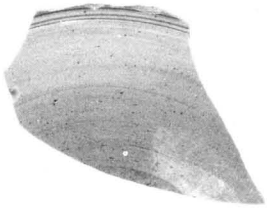


5

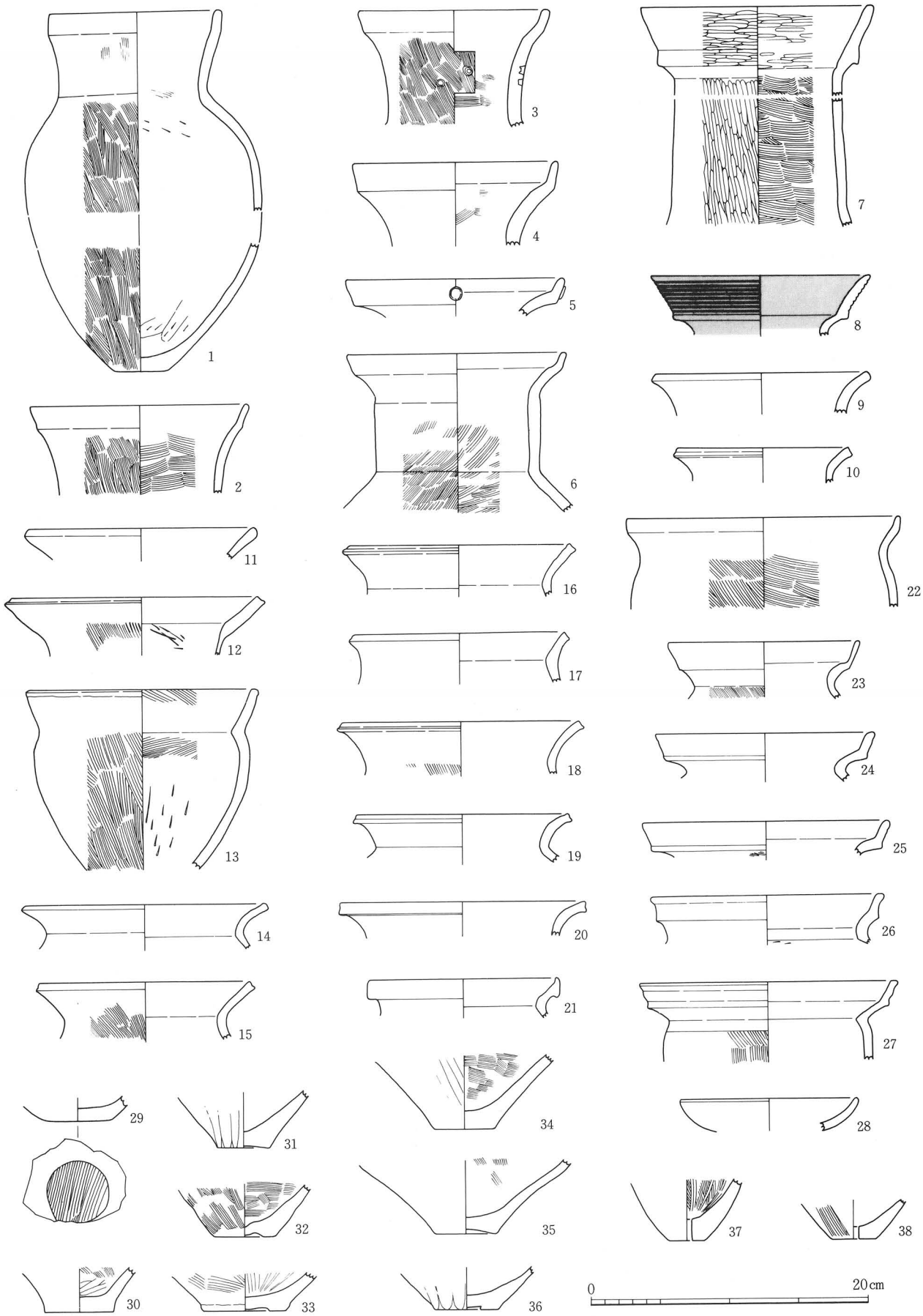








## 図版第18　湯上Ｂ遺跡第3地区（1～38・1/4）

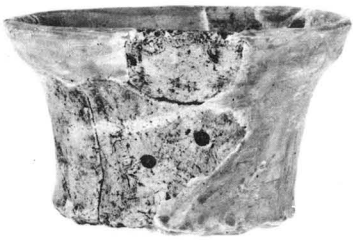


図版第19

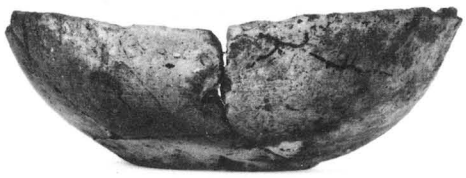
1

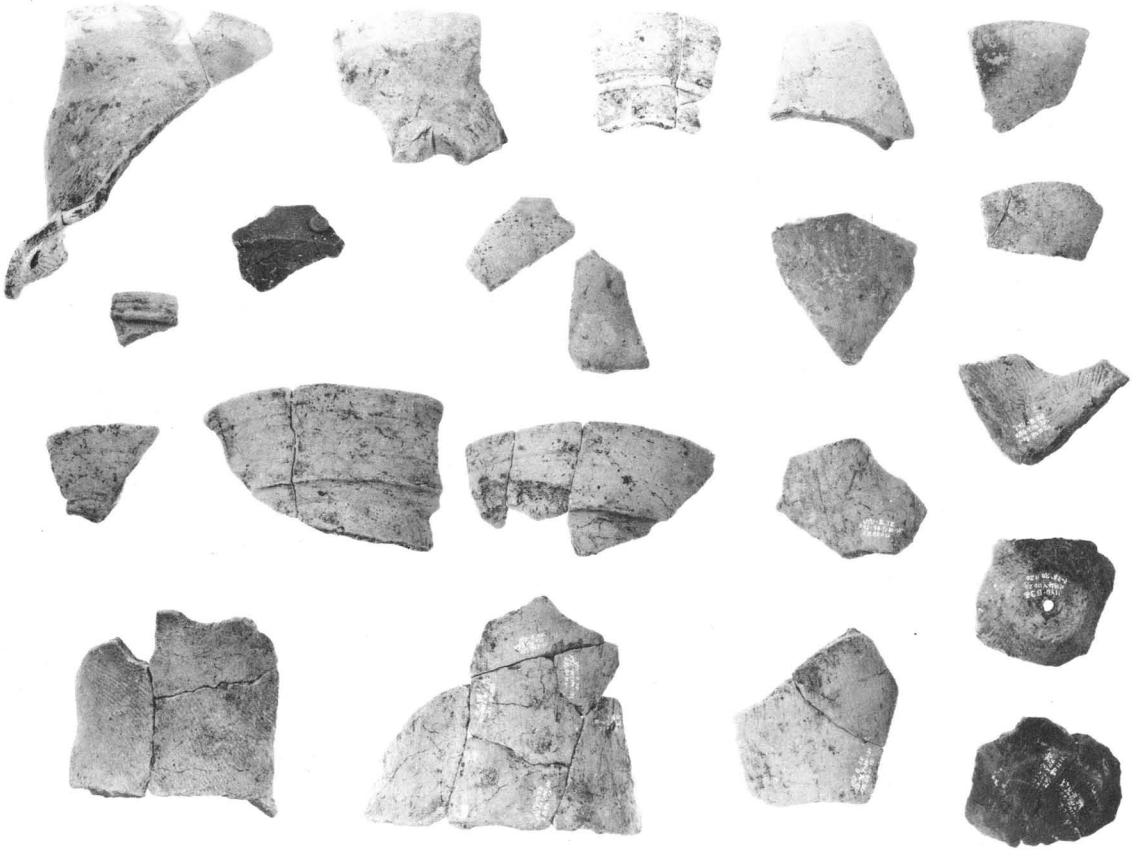
39

49

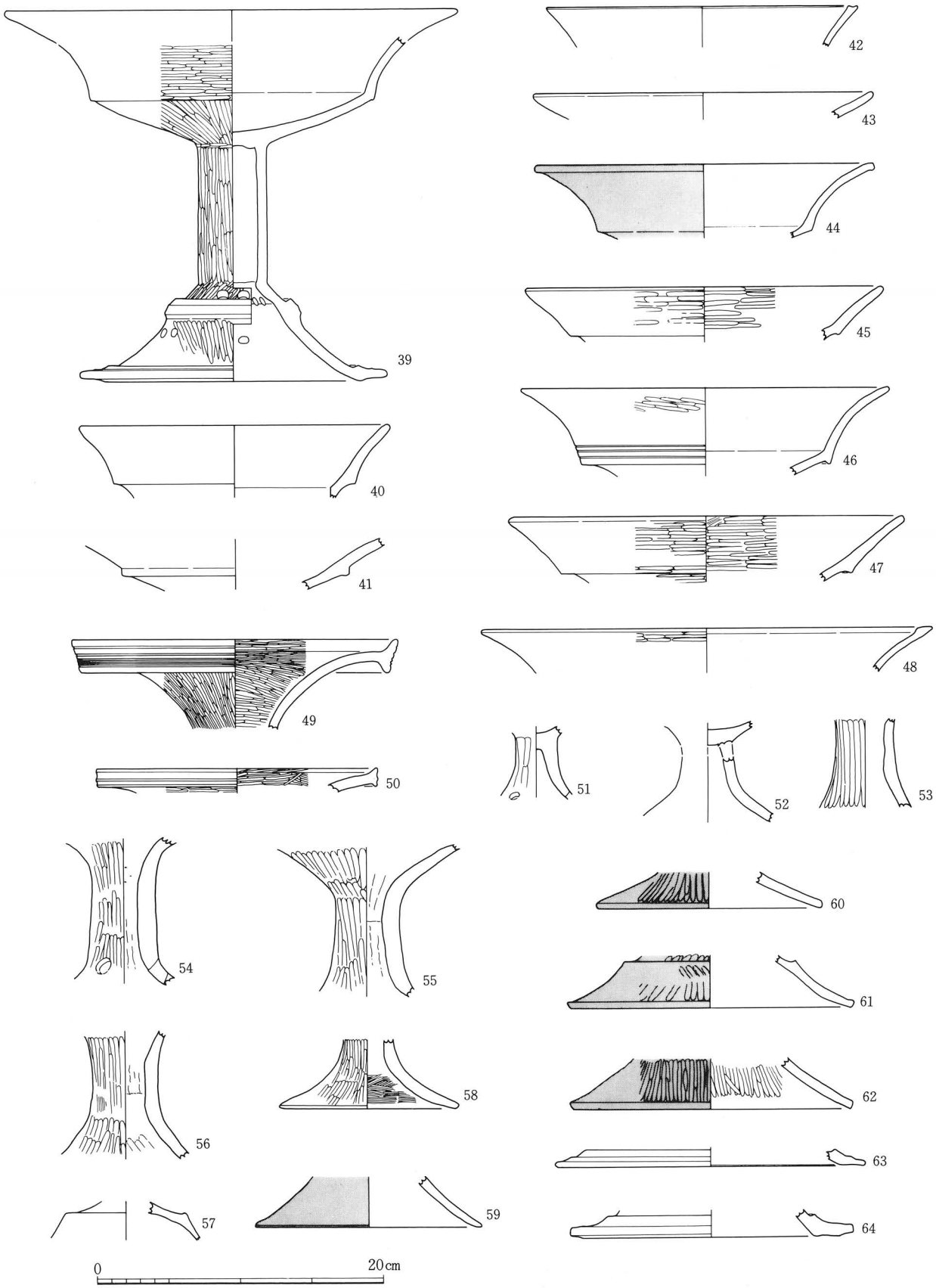


3

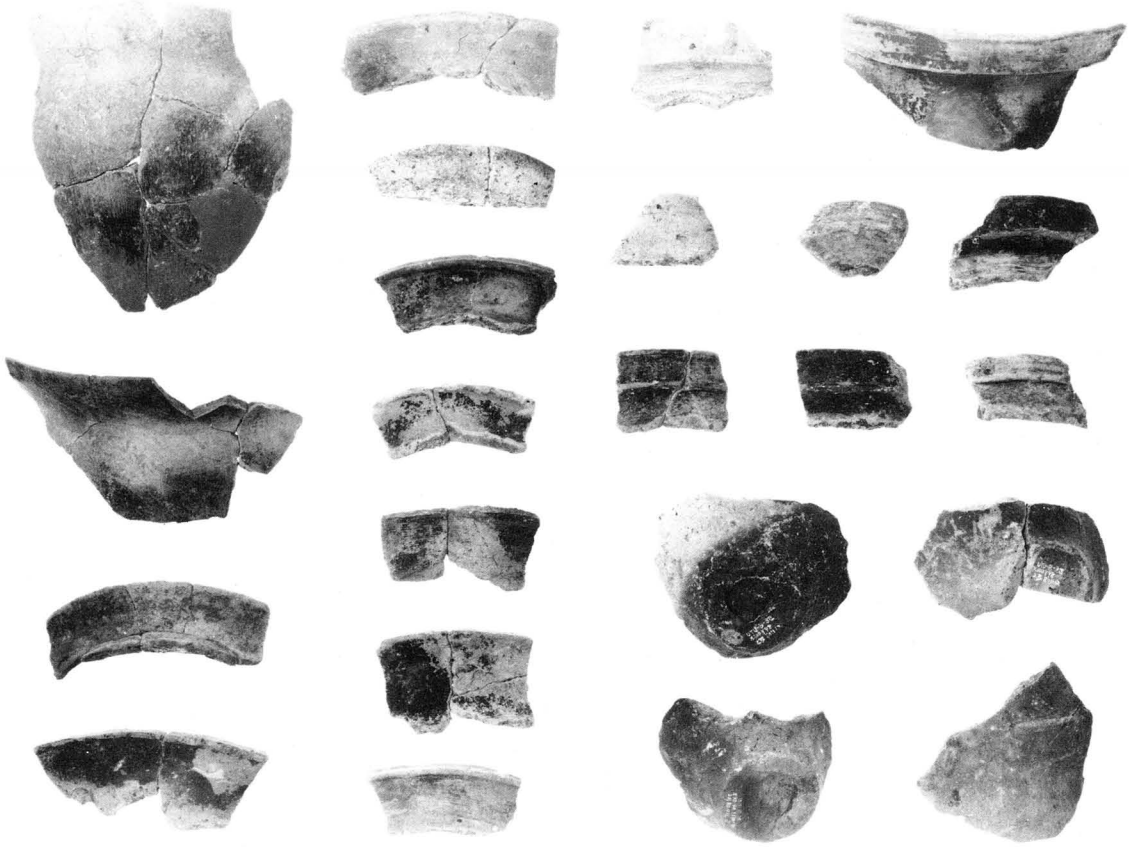




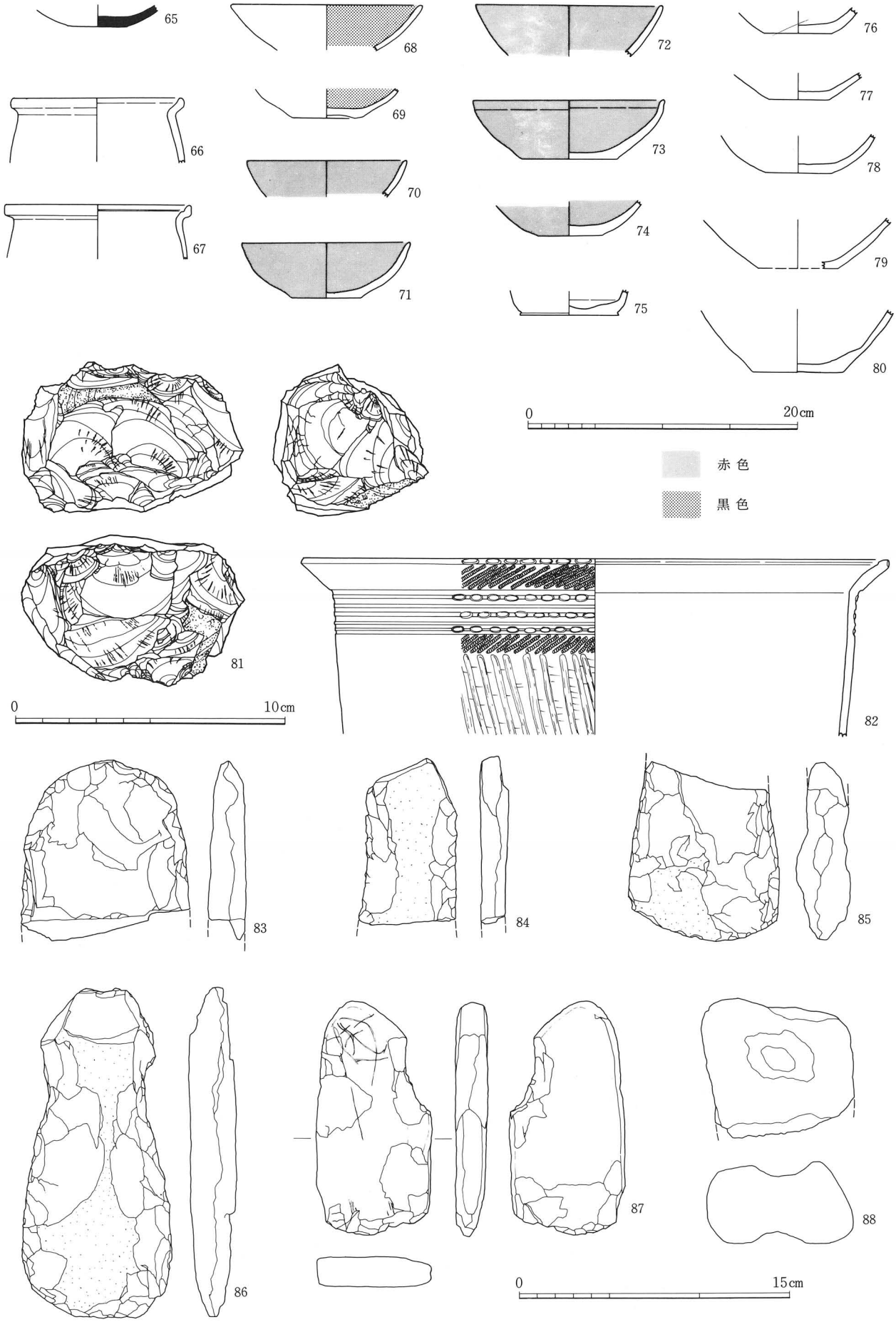
## 図版第20　湯上Ｂ遺跡第3地区（39～64・1/4）

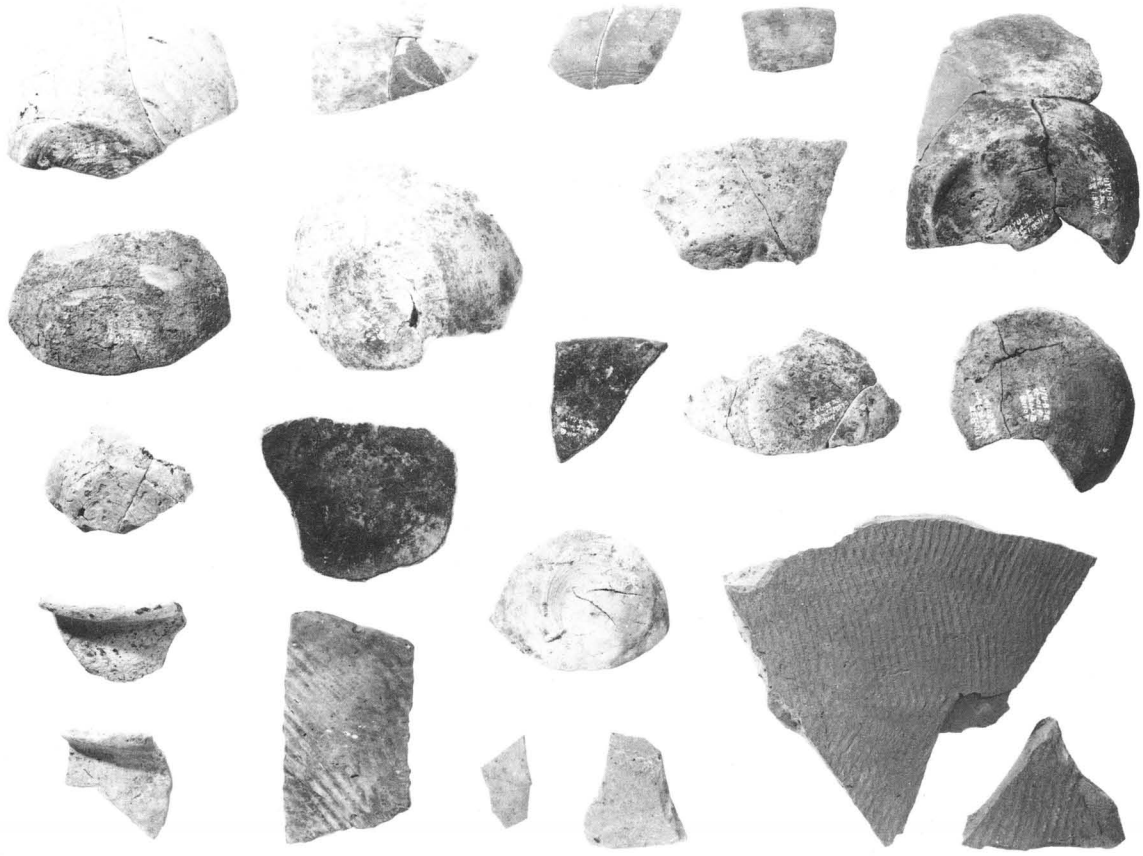


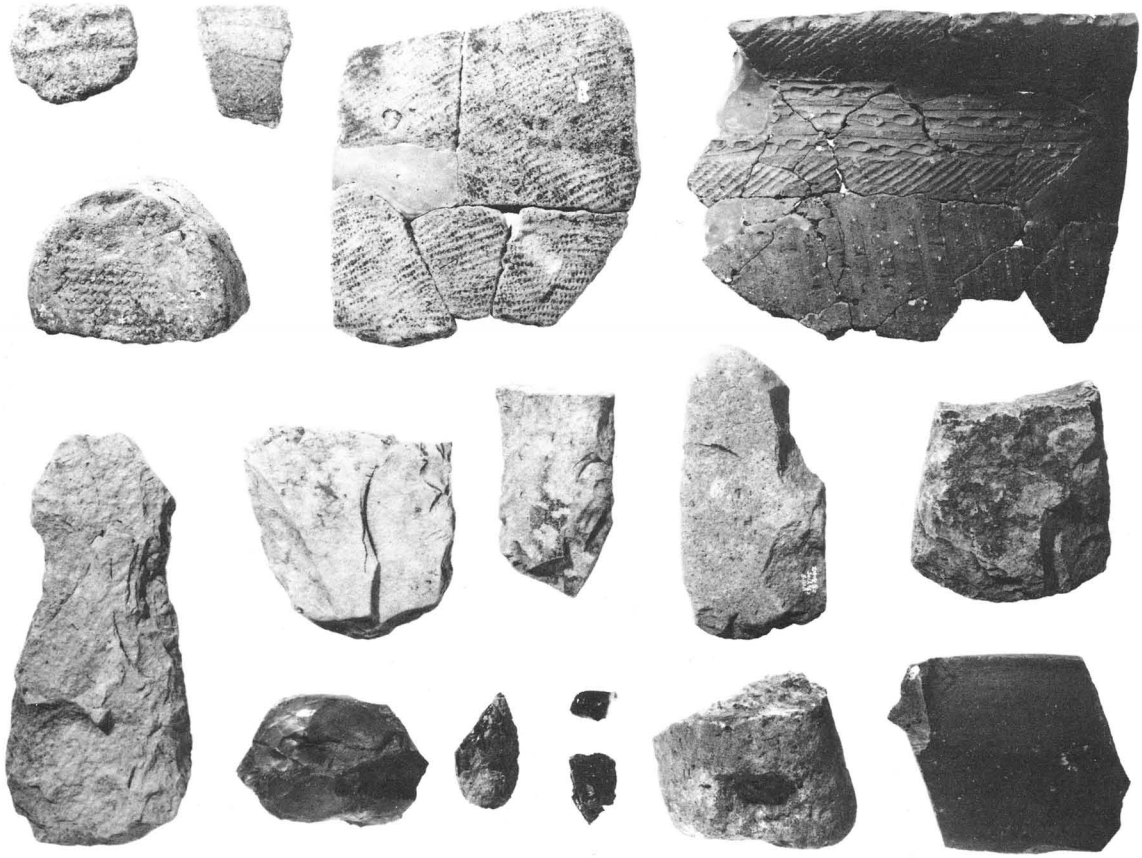
図版第21



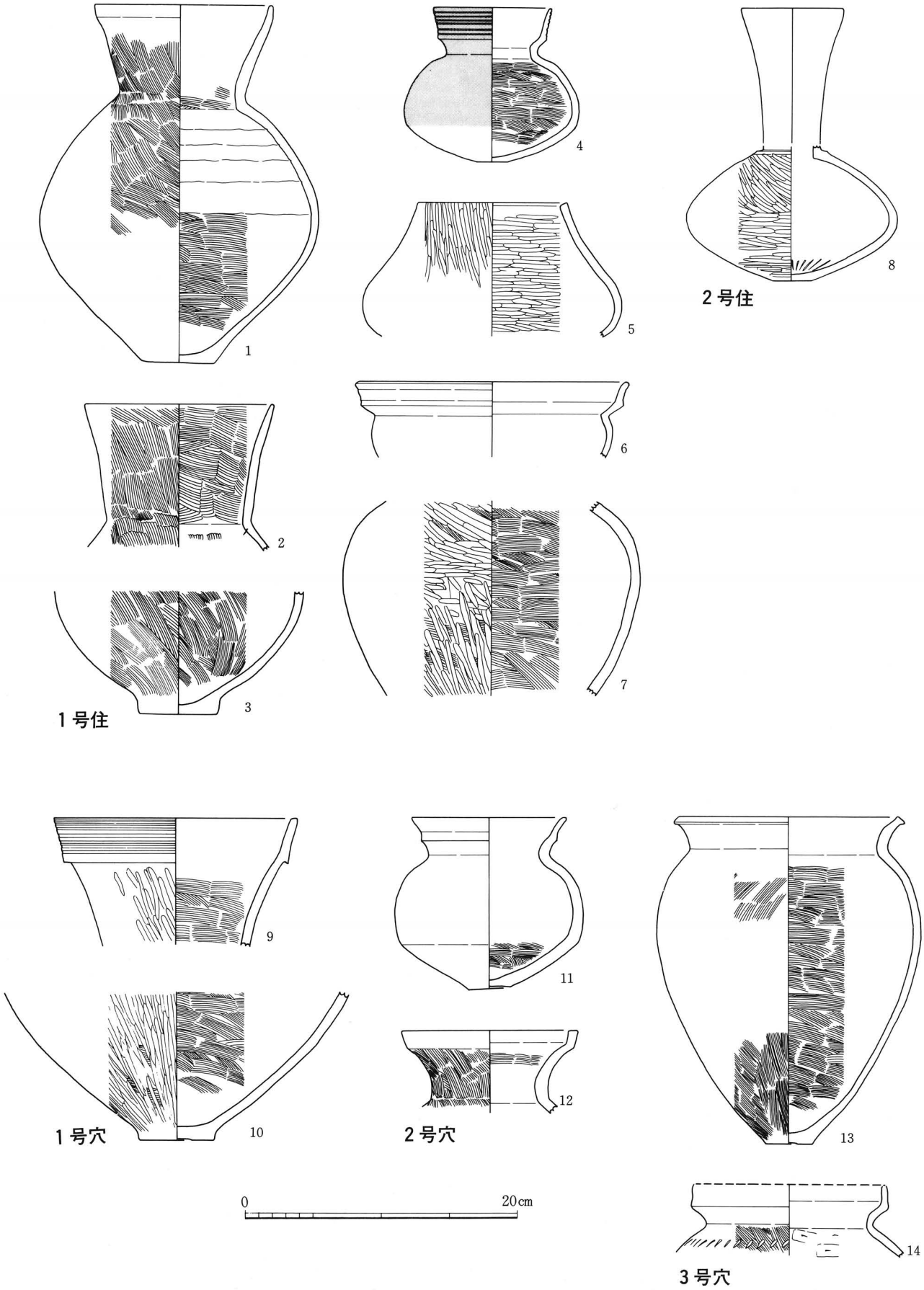
## 図版第22　湯上B遺跡第3地区 (65～80.82・1/4, 81・1/2, 83～88・1/3)







## 図版第24　湯上Ｂ遺跡第4地区（1～14・1/4）

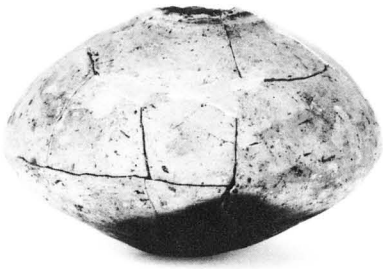


図版第25

1

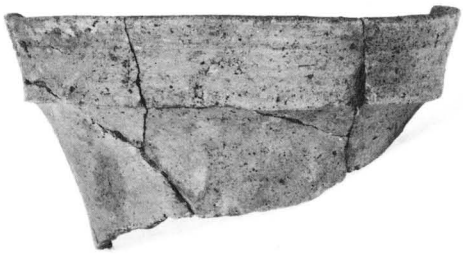
4

3



8

11

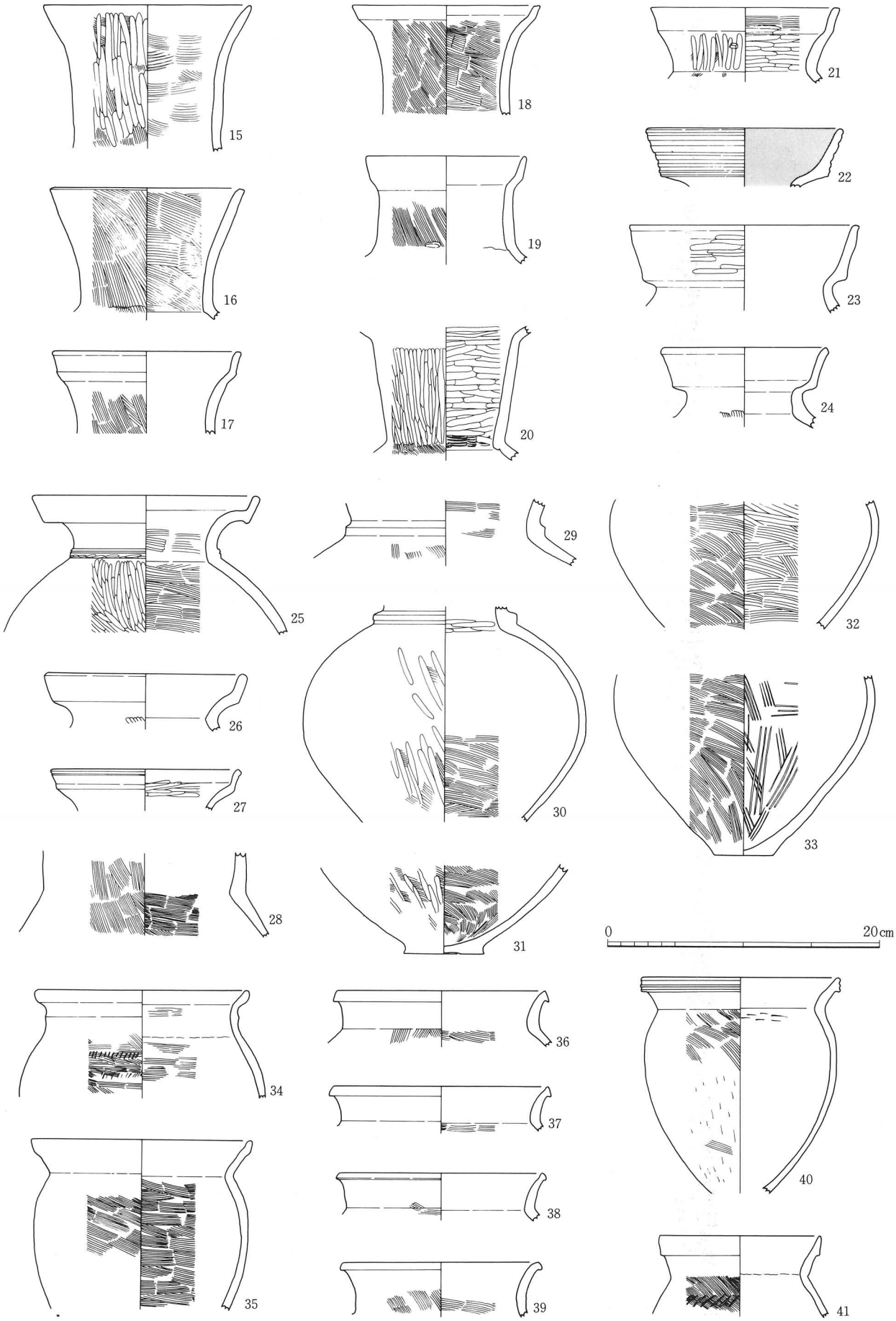


9

10

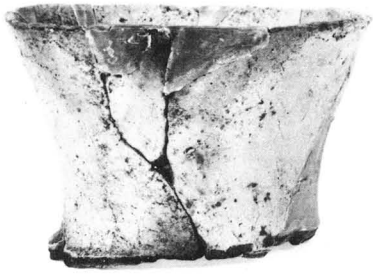
13

## 図版第26　湯上B遺跡第4地区 (15～41・1/4)

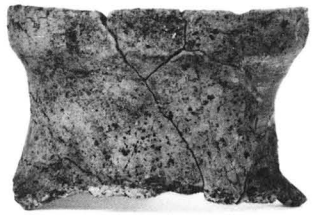


図版第27

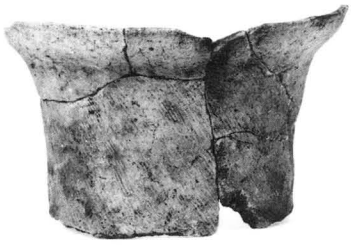
15



16

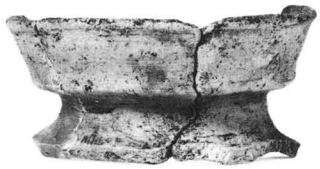


19

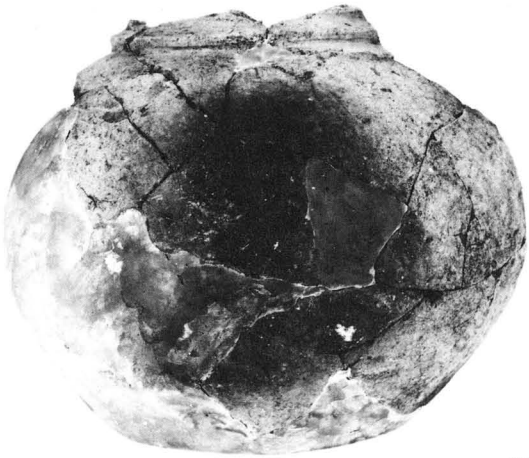


18

20

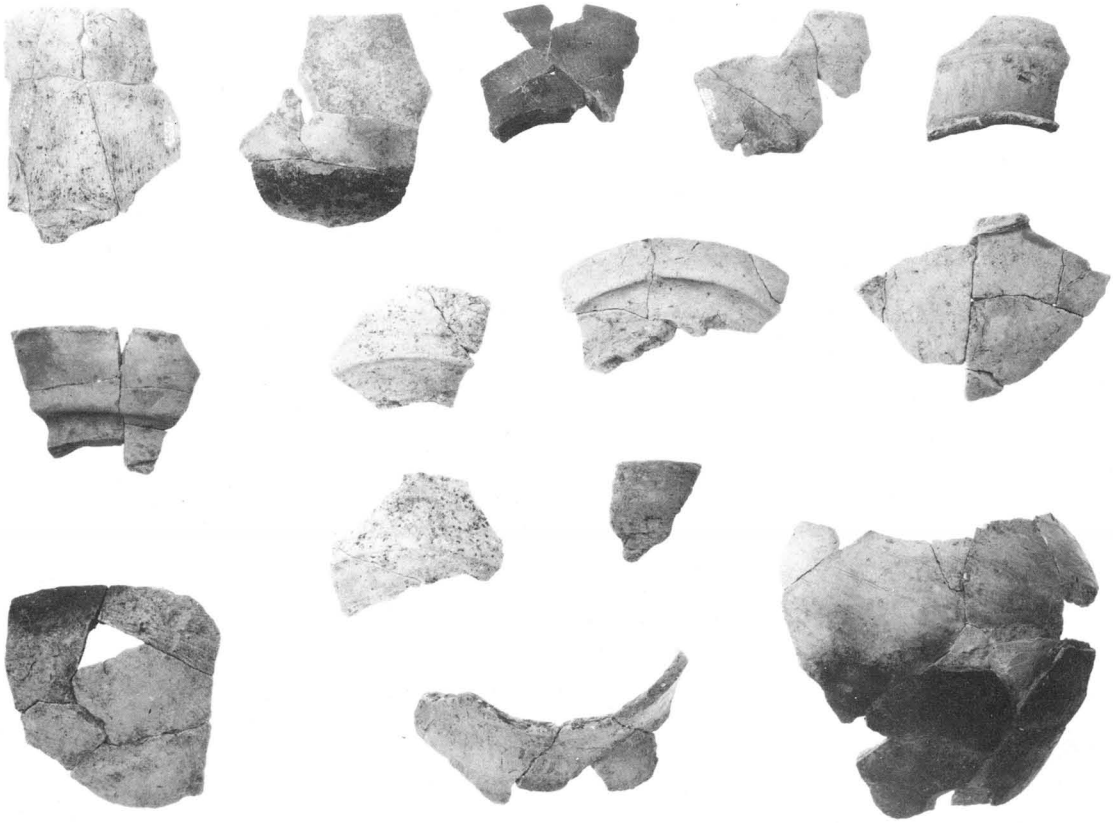


24

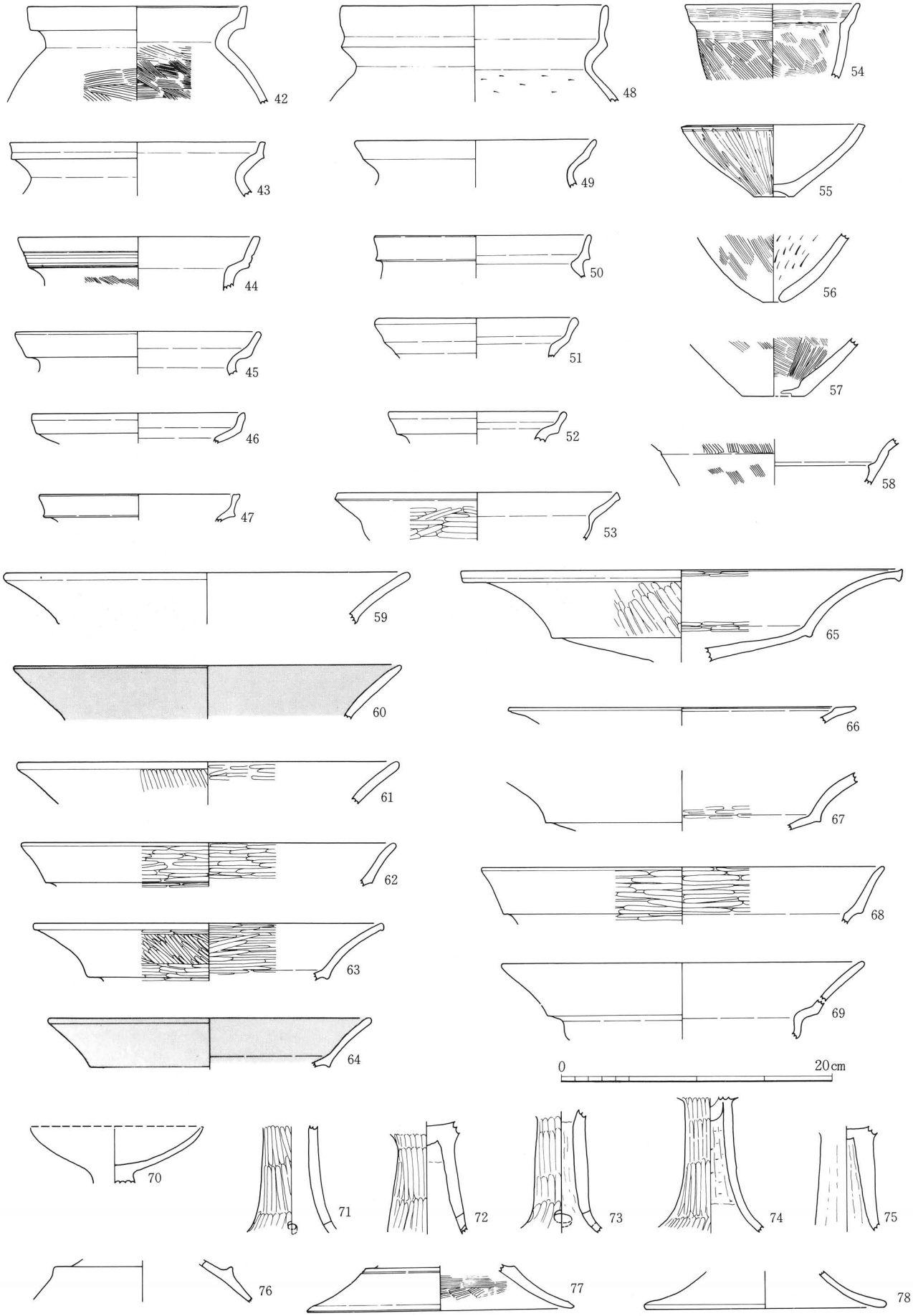


30

40



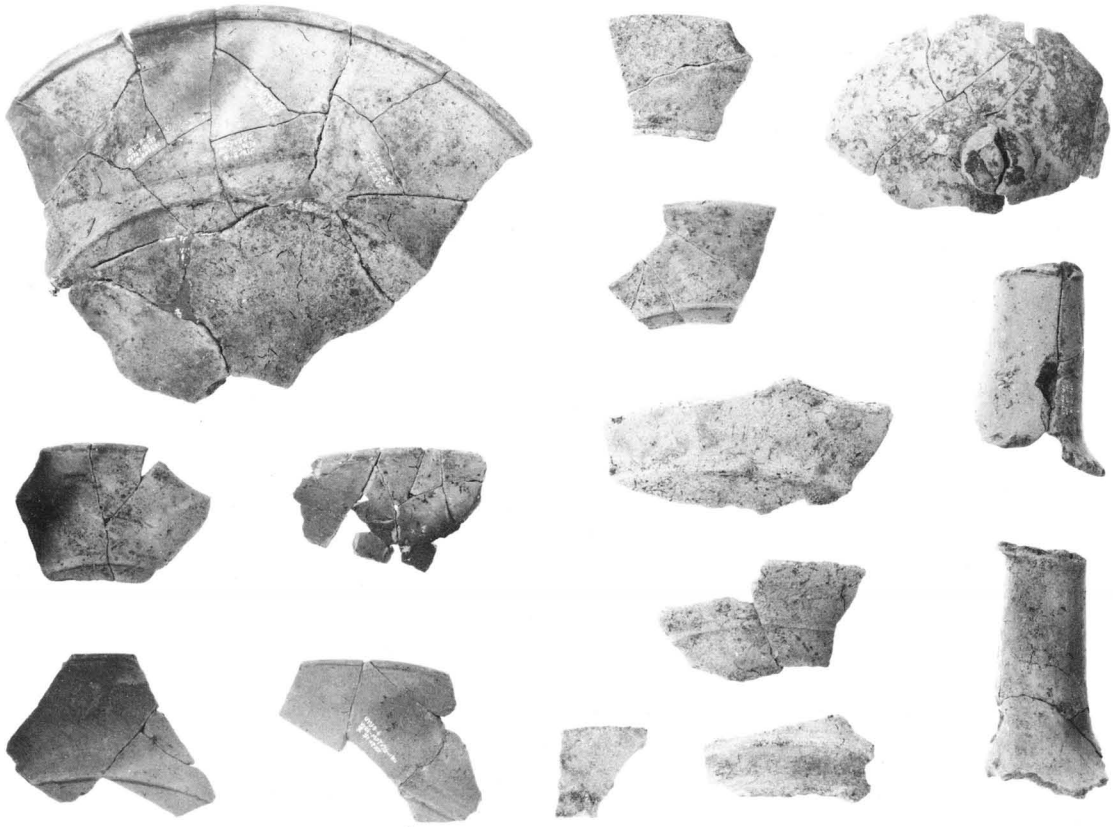
## 図版第28　湯上Ｂ遺跡第4地区 (42～78・1/4)



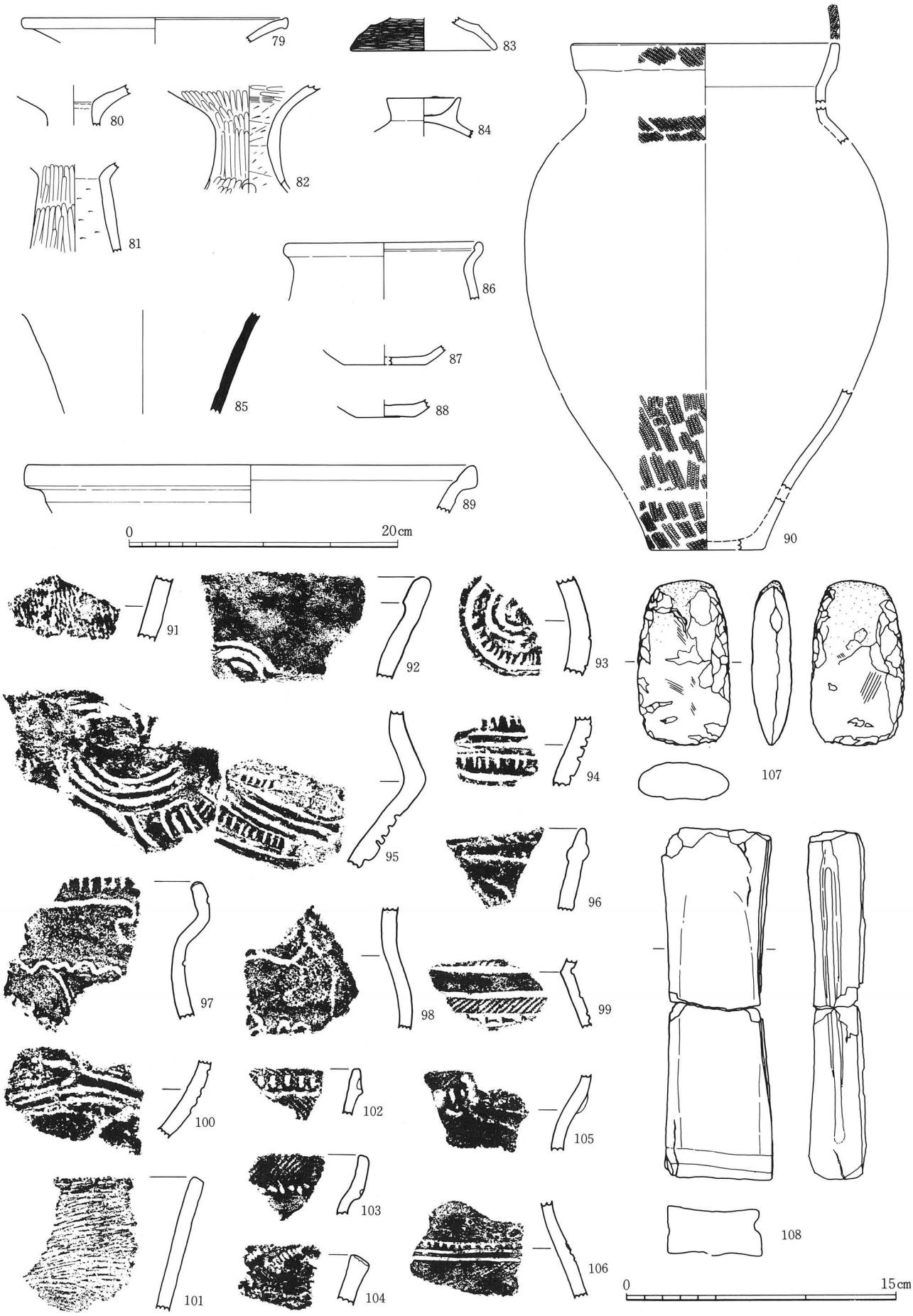
図版第29

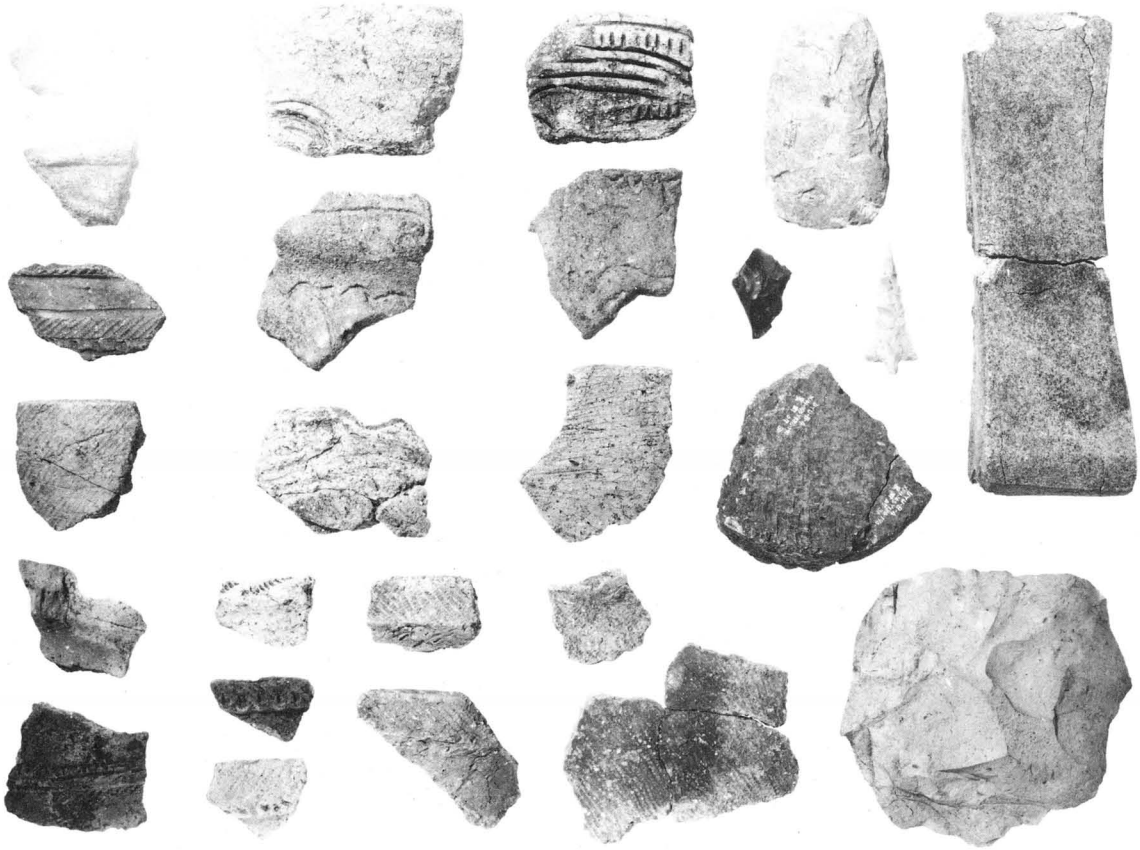
42

55

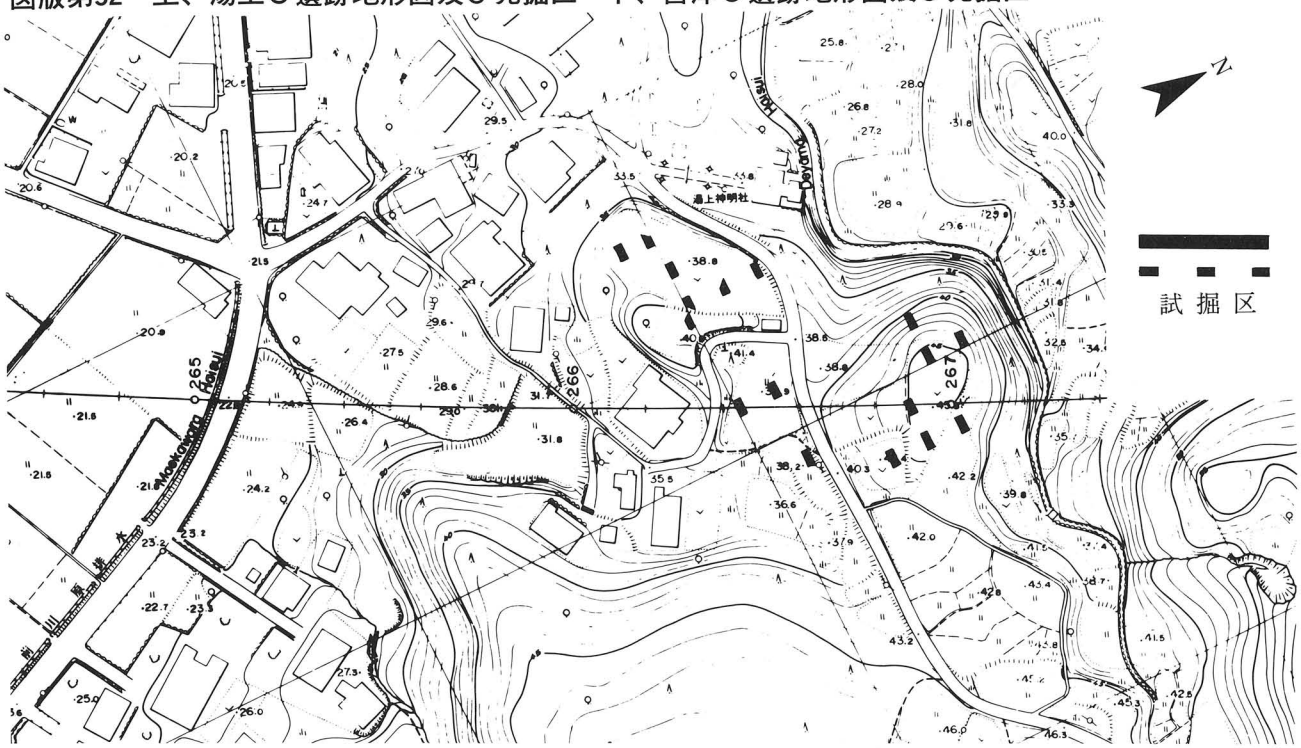


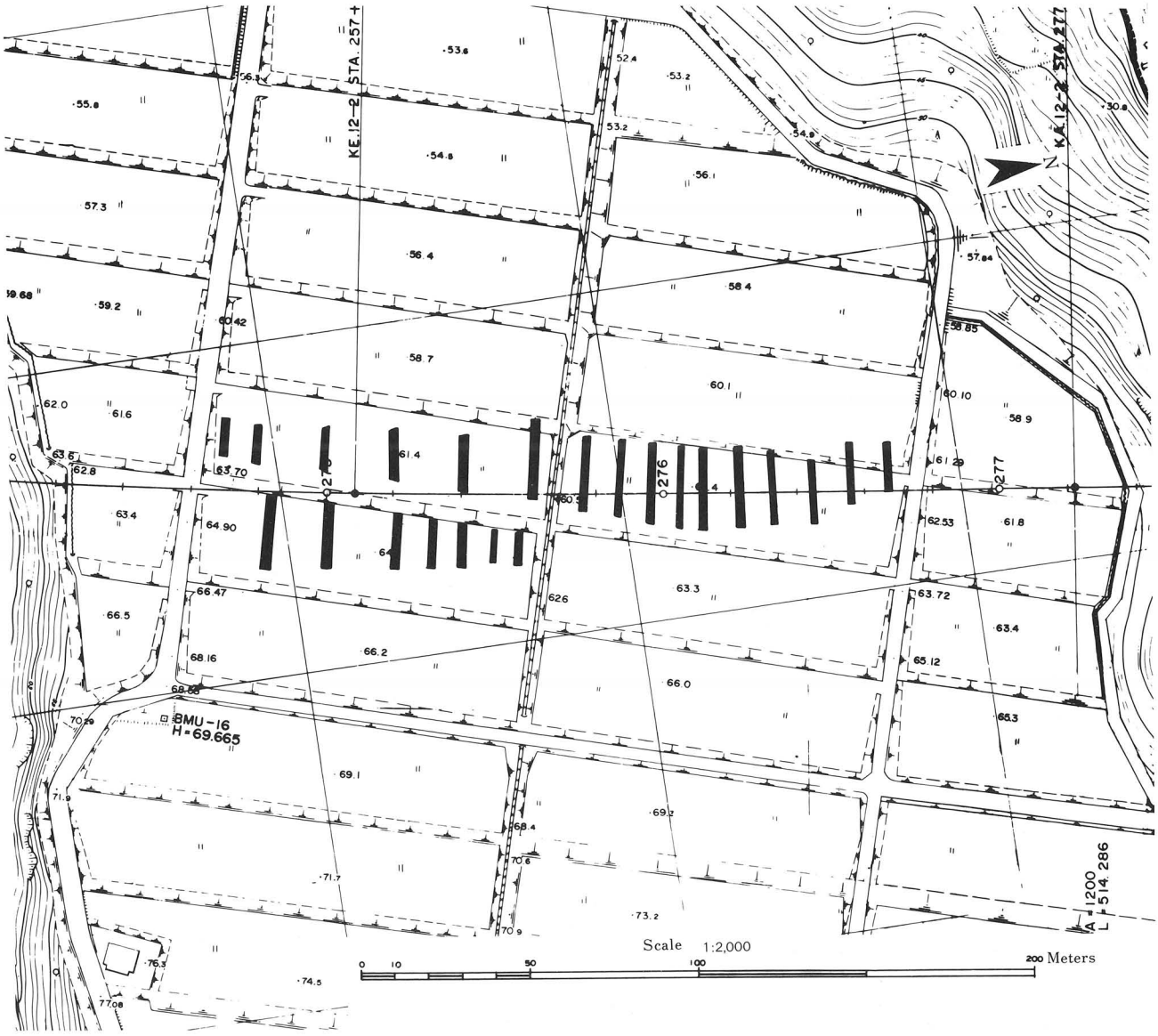
## 図版第30　湯上Ｂ遺跡第4地区（79～90・1/4, 91～108・1/3）





図版第32　上、湯上C遺跡地形図及び発掘区　下、宮津C遺跡地形図及び発掘区



湯上Ｃ遺跡全景

宮津Ｃ遺跡全景

## 発掘参加者一覧

阿部浩一・伊井建治・稲垣豊治・内田植司・奥村平信・奥村守賢・川上恭右・杉崎直樹・杉崎正樹・杉本久信・大丸久仁・竹田浩樹・林　清則・林　政二・林　利政・林　盛弘・平川喜一・平川正雄・古川保忠・三鍋弘悦・村井　剛・村井久義・本松義雄・山根要造・山村郁郎・山本清澄・青木花枝・泉　ミツエ・伊東玉子・上田百合子・内田フジイ・大崎すみ子・大野スズエ・岡崎ツギ・岡崎つなえ・岡崎ミサヲ・小川タモツ・小川ミヨ・奥村敏子・城能キクエ・木本　操・窪田ツタ・沢田佳子・椎名慈子・椎名末子・椎名よし子・清水ツヤ・清水ミヨシ・上楽節子・上楽ハナ子・信清スミ子・杉本トシイ・高瀬貞子・谷川芙美子・谷口町子・谷口ゆか子・寺崎喜美子・富田隆子・中田静子・中村久枝・野崎トミ・野中文子・野村菊枝・野村トミ・林キクエ・林　弘子・林ミツエ・林　陽子・飛田美紀枝・平田活子・平田ハナエ・広明ミエ子・広田ミキイ・古川あや子・古川文子・堀田キヨシ・松井サヨ・松井ヒノ・松瀬ヨシエ・松原シズエ・松原ミツエ・松原ヨシエ・松藤タキ・松藤ハツエ・三鍋愛子・村井文子・本松　操・柳瀬フミ・柳瀬礼子・山崎勝子・山崎サキ・山林千世子・結城ヨキ・吉浦キクイ・吉浦ハツエ・若崎コト・若崎丸子


北陸自動車遺跡調査報告

―― 魚津市編 ――

発行日　昭和57年3月31日

編集者　富山県埋蔵文化財センター

発行者　富山県教育委員会

印刷者　中村印刷工業株式会社